

佐賀大学美術館

THE SAGA UNIVERSITY ART MUSEUM

平成29年度 年報十紀要

2017



THE SAGA UNIVERSITY ART MUSEUM 佐賀大学美術館

8/24 木 & 10/9 月・祝

佐賀の染色文化  
 鈴木照次・潞人から  
 城秀男と佐賀県染織作家協会の今

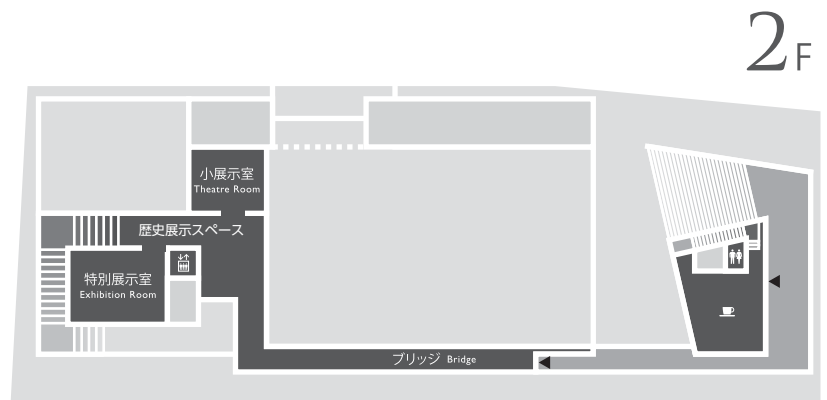
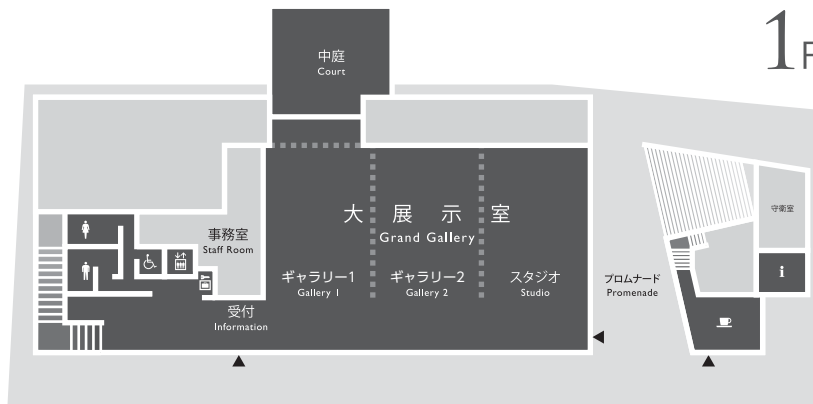
無料  
 10時～17時（入館料あり）  
 開館日  
 9月18日・10月9日（土）  
 休館日  
 9月19日（土）  
 9月17日（日）

主催：佐賀大学美術館  
 共催：佐賀県染織作家協会  
 後援：佐賀県・佐賀県教育委員会・佐賀市・佐賀市教育委員会、  
 (公財)佐賀県芸術文化協会、佐賀新聞社、西日本新聞社、  
 サガテレビ、NHK佐賀放送局、エフエム佐賀



# 〔館概要〕

名 称	佐賀大学美術館
所 在 地	佐賀市本庄町1番地
基本設計	佐賀大学
実施設計	(株)梓設計九州支社/協力:(株)ワークヴィジョンズ
監 理	佐賀大学環境施設部
施 工	建築:金子建設(株) 電気:(株)佐電工 機械:(株)九電工
構 造	鉄骨造・地上2階建
延床面積	1,502㎡
展示面積	462㎡ ギャラリー1 106㎡ ギャラリー2 106㎡ スタジオ 111㎡ 特別展示室 48㎡ 小展示室 34㎡ 歴史展示スペース 57㎡
そ の 他	プロムナード 中庭 ブリッジ
設 備	トイレ 多目的トイレ ロッカー
併 設	カフェ



## 〔沿革〕

- 平成23年 1月 4日 学長年頭挨拶で美術館設置計画を発表
- 平成23年 6月 8日 佐賀大学役員会にて美術館設置諮問委員会からの答申書を報告。  
美術館の設置を審議・了承。同時に3WG（設置募金、利用、建設）についても報告
- 平成23年12月20日 美術館基本設計建設コンサルタント選定委員会で基本設計コンサルタント選定
- 平成24年 2月22日 佐賀大学役員会にて基本設計のイメージを説明、募金趣意書の作成を提案・了承
- 平成24年 5月14日 基本設計納入
- 平成24年12月29日 美術館実施設計終了
- 平成25年 2月14日 新営工事起工式
- 平成25年 6月26日 美術館規則、美術館運営委員会規定制定
- 平成25年 8月30日 美術館建設工事竣工
- 平成25年 9月28日 佐賀大学統合10周年記念式典・佐賀大学美術館開館記念式典
- 平成25年10月 2日 一般公開開始
- 平成26年10月24日 入館者 5万人達成
- 平成26年度 第18回佐賀市景観賞受賞（2015年 1月22日（木））
- 平成28年 2月19日 入館者10万人達成

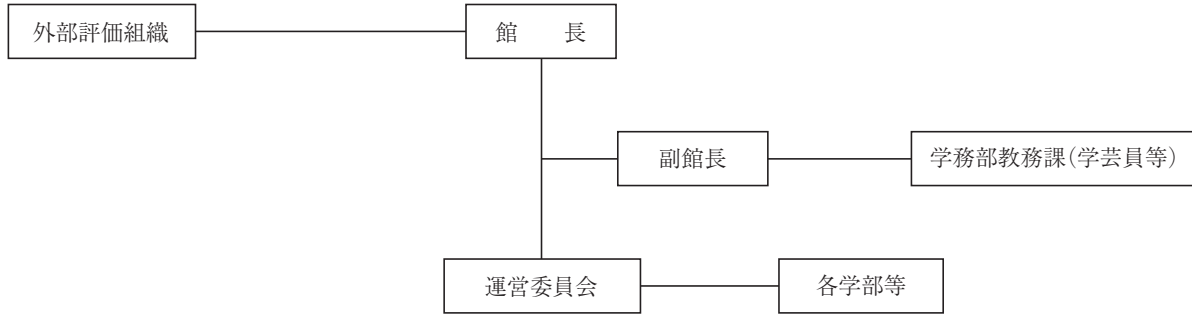
## 〔設立主旨〕

平成25年10月、旧佐賀大学と佐賀医科大学の統合10周年記念事業として佐賀大学美術館は誕生しました。美術館と、併せて整備された正門エリアは、「地域に開かれた大学」という佐賀大学の理念を象徴するものです。美術館は、総合大学である佐賀大学の魅力を多方面に向けて、より多くの人に知っていただくための情報発信源として活用されています。

## 〔活動目的〕

佐賀大学が所有する資料や、美術・工芸に関連する作品を収集・保管・展示するとともに、文化芸術の新しい活動や表現を地域の方々とともに作り上げ、総合大学が生み出すさまざまな研究成果を周知・公開していきます。

# 〔組織図〕



## 〔職員〕

館長	後藤 昌 昭
副館長	徳安 和 博
主任(学芸員)	佐々木 奈美子 (～平成29年9月30日)
係長	枝國 武 司 (平成29年10月1日～)
事務員(再雇用)	西村 彰
事務補佐員(学芸員)	鬼塚 美津子
事務補佐員(学芸員)	今村 真由美
事務補佐員(学芸員)	出口 智佳子

平成30年3月31日現在

## 〔運営委員〕

委員長(館長)	理事	後藤 昌 昭
副委員長(副館長)	教授	徳安 和 博
委員	准教授	和田 学
委員	教授	柳 健 司 (～平成29年9月30日)
委員	准教授	花田 伸 一 (平成29年10月1日～)
委員	准教授	小川 哲 彦
委員	准教授	村田 尚 恵 (～平成29年9月30日)
委員	准教授	室屋 和 子 (平成29年10月1日～)
委員	准教授	後藤 隆太郎 (～平成29年9月30日)
委員	教授	後藤 聡 (平成29年10月1日～)
委員	教授	白武 義 治 (～平成29年9月30日)
委員	准教授	中井 信 介 (平成29年10月1日～)
委員	学務部長	池 尻 英 一
委員	佐賀大学 同窓会長	金 丸 安 隆
委員	教授	荒木 博 申
委員	財務部長	猿 渡 毅

平成30年3月31日現在

# 目次

## [年報]

- 3 ——— 館概要
- 4 ——— 沿革
- 5 ——— 組織図
- 7 ——— 平成29年度の活動
  - 1. 展示記録（主催）
  - 2. 展示記録（企画申請）
  - 3. 実習・研修
  - 4. 刊行・掲載・見学
  - 5. 寄附
  - 6. 職員の館外調査研究・研修等
  - 7. 新収蔵作品
  - 8. 作品修復・貸出
  - 9. 入館者一覧表

## [紀要]

- 43 ——— 展覧会報告書
  - 「塑像と素材—佐大の彫刻」展
  - 展覧会報告と緒方敏雄、古賀忠雄について  
今村 真由美（佐賀大学美術館 学芸員）
  - 研究ノート
  - 岩永京吉作品における女性像の一考察
  - 佐賀大学美術館所蔵《裸婦》（1963）を中心に  
出口 智佳子（佐賀大学美術館 学芸員）

## 〔平成29年度の活動〕

平成29年 4月21日 「塑像と素材―佐大の彫刻」(～8.20)

4月28日 「佐賀大学と『美協展』」(～6.11)

6月16日 「新収蔵品展 緒方敏雄・久富邦夫・榑崎重視―官立佐賀師範の青春」(～7.16)

8月24日 「佐賀の染色文化～鈴田照次・滋人から城秀男と佐賀県染織作家協会の今」(～10.9)

10月17日 「たたずむ女性たち―所蔵品にみる女性像」(～3.25)



# 1. 展示記録（主催）

## 塑像と素材—佐大の彫刻

### 《展覧会概要》

佐賀大学の彫刻教室初代教授である緒方敏雄と非常勤講師として駆け付けた古賀忠雄の2名を筆頭に、山本民二、成富宏、徳安和博ら彫刻教室の歴代教授と非常勤講師であった安永良徳の作品を紹介した。

《会期》平成29（2017）年4月21日（金）～8月20日（日）

《開館日数》103日間

《会場》特別展示室

《主催》佐賀大学美術館

《協力》成富宏（佐賀大学名誉教授）、徳安和博（佐賀大学教授）

《展示構成》彫刻7点

《入館者数》2,636人

《広報物》チラシ、ポスター、外看板、HP、FB

《配布資料》チラシ、目録



チラシ



出品リスト

No	作家名	作品名	制作年	寸法 (cm)	素材	所蔵先
1	緒方敏雄	女性立像		133×30×27	FRP	佐賀大学美術館 (山田英智氏寄贈)
2	安永良徳	人物		30×9.7×9	ブロンズ	佐賀大学美術館
3	古賀忠雄	男の顔		70.4×22.6×27.7	石こう	佐賀大学美術館
4	古賀忠雄	男の顔	1947, 8 (昭和22, 23)	66×22×29	ブロンズ	佐賀大学美術館
5	山本民二	無題	1979 (昭和54)	46.5×40×26.1	FRP	佐賀大学美術館
6	成富 宏	亜紀	2001 (平成13)	80×46×28	FRP	作者蔵
7	徳安和博	アンドロメダ	2017 (平成29)		FRP	作者蔵



## <美協100回展関連企画>佐賀大学と美協展

### 《展覧会概要》

大正2年に発会した佐賀美術協会による総合美術展「美協展」が100回展を迎えるにあたり企画された。

本展では、佐賀大学の在校生・卒業生の公募部門の作品の中から一席である「美協賞」を受賞したおよそ80名の100点について追跡し、作者・所蔵者の協力の下、約30点を展示した。出品が叶わなかった作品も、写真や当時の新聞記事などで可能な限り紹介し、「特美」の時代から第99回展まで、60年以上に渡り並走しながら地方画壇を守ってきた佐賀大学と佐賀美術協会の歴史を紐解いた。

《会期》平成29(2017)年4月28日(金)～6月11日(日)

《開館日数》39日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ

《主催》佐賀大学美術館

《協力》佐賀美術協会

《展示構成》美協展で第一席を受賞した作品(西洋画、日本画、彫塑、工芸)34点

写真パネル23点、新聞記事などの資料他

《入館者数》3,168人

《広報物》チラシ、ポスター、外看板、HP、FB

《配布資料》チラシ

《関連事業》ギャラリートーク

第1回 「われら昭和60年代組—最後の特美生」

日時：5月14日(日)

第2回 「開幕！100回展—美協展と佐賀大学」

日時：5月27日(土)

第3回 「佐大の青春—思い出の先生・先輩・仲間たち」

日時：6月10日(土)

※いずれも13:30～



ポスター



第1回ギャラリートーク



第3回ギャラリートーク



第2回ギャラリートーク

## 出品リスト

No.	作家名	タイトル	受賞年	素材・形状	寸法	出品歴	所蔵先
1	金子 剛	母と子と	1961 (昭和36)	油彩・カンヴァス	130.3×97	第44回佐賀美術協会展	作者蔵
2	下平武敏	学芸会	1965 (昭和40)	油彩・カンヴァス	112.2×145.5	第48回佐賀美術協会展	作者蔵
3	宮尾正隆	つぼ	1966 (昭和41)	陶器	35×24×24	第49回佐賀美術協会展	作者蔵
4	杉原敏捷	花笠をのせた牛	1967 (昭和42)	油彩・カンヴァス	145.5×112.2	第50回佐賀美術協会展	作者蔵
5	竹永 正	讃歌	1969 (昭和44)	布	124×88	第52回佐賀美術協会展	作者蔵
6	山田直行	蒼い風	1971 (昭和46)	油彩・カンヴァス	162×130.3	第54回佐賀美術協会展	作者蔵
7	山田直行	蒼い影	1972 (昭和47)	油彩・カンヴァス	162×130.3	第55回佐賀美術協会展	作者蔵
8	下村康二	ある日の印象 (3)	1975 (昭和50)	油彩・カンヴァス	130.3×162	第58回佐賀美術協会展	金立特別支援学校
9	執行安正	朝市 LAST	1976 (昭和51)	油彩・カンヴァス	130.3×162	第59回佐賀美術協会展	作者蔵
10	塚本猪一郎	裁縫 (第60回記念賞同時出品作)	1977 (昭和52)	油彩・カンヴァス	130.3×162	第60回佐賀美術協会展	作者蔵
11	大石恵三	ブランコ	1978 (昭和53)	油彩・カンヴァス	162×130.2	第61回佐賀美術協会展	作者蔵
12	宮崎 甲	男の首	1979 (昭和54)	セメント (台座:石)	H31.5	第62回佐賀美術協会展	佐賀県立美術館
13	石橋國男	若葉	1984 (昭和59)	磁器	21.5×38×38	第67回佐賀美術協会展	作者蔵
14	徳安和博	束縛と抵抗	1988 (昭和63)	FRP	H176	第71回佐賀美術協会展	佐賀県立美術館
15	片山徹也	漂立	1990 (平成2)	岩絵具・和紙	91×116.6	第73回佐賀美術協会展	作者蔵
16	大童昭久	トルソー	1994 (平成6)	FRP	45×30×30	第77回佐賀美術協会展	作者蔵
17	五貫研司	満ちゆく月に	1995 (平成7)	岩絵具・和紙	130.2×162	第78回佐賀美術協会展	佐賀県立美術館
18	野田和弘	舞う	1995 (平成7)	木彫・金属	143×204×111	第78回佐賀美術協会展	個人蔵
19	佐藤 文	仕事場	1997 (平成9)	岩絵具・紙	130.3×97	第80回佐賀美術協会展	作者蔵
20	石丸英章	31: ONLY A HOBO	1998 (平成10)	岩絵具・紙	162×111.7	第81回佐賀美術協会展	佐賀県立美術館
21	神之浦修一	完璧な恐怖の中で	2001 (平成13)	岩絵具・紙		第84回佐賀美術協会展	作者蔵
22	八谷真弓	ガロア	2002 (平成14)	岩絵具・雲肌麻紙	119.7×91	第85回佐賀美術協会展	作者蔵
23	市丸未来	花 -heart and time-	2003 (平成15)	アクリル・カンヴァス	130.2×162	第86回佐賀美術協会展	作者蔵
24	瀬戸口朗子	カミカシ	2004 (平成16)	布・アクリル他	162×162	第87回佐賀美術協会展	作者蔵
25	小泉夕可利	すってんこ	2004 (平成16)	木彫 (クスに着色)	90×90×100	第87回佐賀美術協会展	作者蔵
26	鳥谷さやか	記憶の回路	2009 (平成21)	木綿布・反応染料	170×100	第92回佐賀美術協会展	作者蔵
27	大神 明	幹	2011 (平成23)	FRP	165×80×70	第94回佐賀美術協会展	作者蔵
28	川原恵吏佳	幼い馬と悲壮な決意を持った調教師	2012 (平成24)	FRP	55×22.5×64.5 53×28.5×50	第95回佐賀美術協会展	作者蔵
29	富安真璃子	玄閑	2012 (平成24)	岩絵具・和紙	116.6×91	第95回佐賀美術協会展	作者蔵
30	深町聡美	なかはくは	2013 (平成25)	岩絵具・墨・紙・和紙	162×130.2	第96回佐賀美術協会展	作者蔵
31	松本凌介	旅の理由	2014 (平成26)	シナベニヤ・綿布・白亜地・油彩	162×162	第97回佐賀美術協会展	作者蔵
32	町田聡子	音のない声	2014 (平成26)	石こう	80×45×40	第97回佐賀美術協会展	作者蔵
33	池田朱音	あおいはな あかいはな	2014 (平成26)	染料・布	92×65 (各)	第97回佐賀美術協会展	作者蔵
34	真崎 友	雑踏を聴く	2015 (平成27)	FRP	115×55×35	第98回佐賀美術協会展	作者蔵

## 写真 (パネル) 紹介

No.	作家名	タイトル	受賞年	素材・形状	寸法	出品歴	画像提供・引用
35	金子 剛	仲良し	1961 (昭和36)	油彩・カンヴァス		第44回佐賀美術協会展	作者提供
36	杉森克彦	少女	1966 (昭和41)	石こう		第49回佐賀美術協会展	作者提供
37	森山洋子	自転車置場	1980 (昭和55)	布・染料		第63回佐賀美術協会展	作者提供
38	高石次郎	時間止まれ II	1982 (昭和57)	陶器	73×52×11	第65回佐賀美術協会展	作者提供
39	西澤秀行	紫光	1984 (昭和59)	岩絵具・雲肌麻紙	116.6×91	第67回佐賀美術協会展	作者提供
40	岩尾徳治	雨の詩	1985 (昭和60)	FRP		第68回佐賀美術協会展	作者提供
41	西澤秀行	この狭い部屋の	1986 (昭和61)	岩絵具・雲肌麻紙	100×100	第69回佐賀美術協会展	作者提供
42	岩尾徳治	柔 (私の空間)	1986 (昭和61)	FRP		第69回佐賀美術協会展	作者提供
43	湯浅義明	景過	1987 (昭和62)	アクリル・板パネル	130.3×162	第70回佐賀美術協会展	作者提供
44	浜口和之	足音	1988 (昭和63)	シナベニヤ・アクリル・岩彩	130.3×97	第71回佐賀美術協会展	作者提供
45	塚原康之	ながいかみ	1991 (平成3)	FRP		第74回佐賀美術協会展	「第80回佐賀美術協会展記念誌」(1990)より
46	小石 克	ありがとう	1996 (平成8)	木彫 (クス)	240×100×100	第79回佐賀美術協会展	作者提供
47	川島源次郎	像	2000 (平成12)	木彫 (クス)	120×180×120	第83回佐賀美術協会展	作者提供
48	内川明日香	親愛	2003 (平成15)	岩絵具・紙	162×97	第86回佐賀美術協会展	作者提供
49	立花克樹	Studio 05'	2005 (平成17)	木彫 (クスに着色)	85×120×50	第88回佐賀美術協会展	作者提供
50	立花克樹	国境の南	2006 (平成18)	木工 (クス)	65×35×32	第89回佐賀美術協会展	作者提供
51	仁戸田典子	共存の大地	2008 (平成20)	油彩・カンヴァス	162×162	第91回佐賀美術協会展	作者蔵
52	白石恵里	水影	2008 (平成20)	FRP	175×55×60	第91回佐賀美術協会展	作者蔵
53	白石恵里	晝鐘-はじまり-	2009 (平成21)	FRP・セメント	195×70×40	第92回佐賀美術協会展	作者蔵
54	仁戸田典子	くろえしの四つの壺	2010 (平成22)	パネルに綿布・白亜地に油彩	116.6×116.6	第93回佐賀美術協会展	作者蔵
55	高松正慎	swell	2010 (平成22)	FRP		第93回佐賀美術協会展	作者蔵
56	真崎 静	ホットスボットチキユウ	2011 (平成23)	シナベニヤ・アクリルガッシュ・銀箔 他	95×144	第94回佐賀美術協会展	作者提供
57	古田夏海	調和	2011 (平成23)	綿布	150×150	第94回佐賀美術協会展	作者提供

※No.1「母と子と」、No.35「仲良し」は2点同時受賞

平成28年度寄贈作品による新収蔵品展  
緒方敏雄・久富邦夫・楢崎重視 官立佐賀師範の青春

《展覧会概要》

平成28年度新収蔵品の中から、佐賀大学開学当初から美術を教え、「特美」の礎を築いた緒方敏雄（彫刻）の女性像2体、久富邦夫（洋画）の在京時代からの絵画及び大学に関する資料、唐津出身の洋画家・楢崎重視の絵画3点と資料約10点を展示。同時に、佐賀大学の前身の一つで三者と関わりの深い「官立佐賀師範学校」についても紹介した。

《会期》平成29（2017）年6月16日（金）～7月16日（日）

《開館日数》27日間

《会場》ギャラリー2、スタジオ

《主催》佐賀大学美術館

《展示構成》彫刻2点、油絵9点、資料10点 計21点

《入館者数》1,950人

《広報物》チラシ、ポスター、外看板、HP、FB

《配布資料》チラシ

《関連事業》ギャラリートーク

担当学芸員による15分程のワンポイント解説

日時：会期中毎週木曜（6月22日、29日、7月6日、13日）

いずれも12：35～12：50



チラシ



外観



第2回ギャラリートーク



第4回ギャラリートーク

出品リスト

No	作家名	作品名	制作年	寸法 (cm)	素材	寄贈者
1	久富邦夫	扇	1940 (昭和15) 年代	91×72.7	油彩・カンヴァス	久富家
2	久富邦夫	手紙	1984 (昭和59)	91×72.7	油彩・カンヴァス	久富家
3	久富邦夫	絵のある部屋	1943 (昭和18)	145.5×97	油彩・カンヴァス	久富家
4	久富邦夫	祭りの日	1974 (昭和49)	162×130.3	油彩・カンヴァス	久富家
5	緒方敏雄	夏折々	1984 (昭和59)	173×58.3×41.4	FRP	山田英智氏
6	緒方敏雄	夏・一章	1985 (昭和60) 頃	173.5×53×42.5	FRP	山田英智氏
7	檜崎重視	五部浄像	1983 (昭和58)	53×45.5	油彩・カンヴァス	檜崎重視氏
8	檜崎重視	ヴォティーフ教会	1999 (平成11)	194×130.3	油彩・カンヴァス	檜崎重視氏
9	檜崎重視	白壁の家	2015 (平成27)	130×162	油彩・カンヴァス	檜崎重視氏
10	久富邦夫	モデルとY先生	1949 (昭和24)	91×72.7	油彩・カンヴァス	久富家
11	久富邦夫	松島風景	1940 (昭和15)	22×27.3	油彩・カンヴァス	久富家

資料

No	作家名	資料名	制作年	寸法 (cm)	素材・形状	寄贈者
12	檜崎重視	日記	1942 (昭和17) ~ 1951 (昭和26)		冊子・手帳	檜崎重視氏
13	檜崎重視	創風会 美術展覧会目録	1947 (昭和22)	42×29.7	紙/目録	檜崎重視氏
14	久富邦夫	「北島浅一先生と私」	1986 (昭和61)		佐賀新聞	久富家
15	久富邦夫	「あの頃」	1987 (昭和62)		図録「石本秀雄展」 140頁	久富家
16	久富邦夫	「石本秀雄さんのこと」	1986 (昭和61)		原稿用紙	久富家
17	久富邦夫	「回想 北島浅一先生」	1986 (昭和61)		原稿用紙	久富家
18	久富邦夫	第一回「郷土作家油絵展」目録	1946 (昭和21)		目録	久富家
19		第18回「佐賀美術協会展」目録	1934 (昭和9)		目録	久富家
20		『佐賀師範学校 創立第五十周年 記念号』相信會部報	1934 (昭和9)			久富家
21	緒方敏雄	愛用の石こうペラ				山田英智氏

## 佐賀の染色文化

鈴木照次・滋人から城秀雄と佐賀県染織作家協会の今

### 《展覧会概要》

「文様の」あるいは「絵画的」に自然や風物を染め上げた佐賀の染色作品を先達、トップランナーから、設立35周年を迎えた佐賀県染織作家協会の会員たち、次世代を担う学生や県内各地で制作普及に尽力する市民の活動まで、一部に染織の作品も織り交ぜ、約140点を紹介した。

会期中は作家を招き、基調講演やパネルディスカッション、ギャラリートークを開催した。

《会期》平成29(2017)年8月24日(木)～10月9日(月・祝)

《開館日数》41日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、特別展示室、小展示室

《主催》佐賀大学美術館

《共催》佐賀県染織作家協会

《後援》佐賀県、佐賀県教育委員会、佐賀市、佐賀市教育委員会、(公財)佐賀県芸術文化協会、佐賀新聞社、西日本新聞社、サガテレビ、NHK佐賀放送局、エフエム佐賀

《展示構成》染色139点、織物5点 計144点(展示替え含む)

《入館者数》5,249人

《広報物》チラシ、ポスター、DM、リーフレット型スケジュール、外看板、HP、FB

《配布資料》チラシ、ポスター、DM、リーフレット型スケジュール

《関連事業》記念シンポジウム

基調講演「染の美を求めて」

講師：鈴木滋人氏(重要無形文化財保持者)

パネルディスカッション「佐賀の染色 未来への展望」

講師：鈴木滋人氏

田中嘉生氏(佐賀大学名誉教授)

鈴木 浩氏(佐賀県染織作家協会会長)

日時：9月2日(土)13:00～

会場：佐賀大学教養教育1号館 125番教室

担当学芸員によるギャラリートーク

日時：8月27日(日)、9月24日(日)いずれも14:00～



ポスター



基調講演



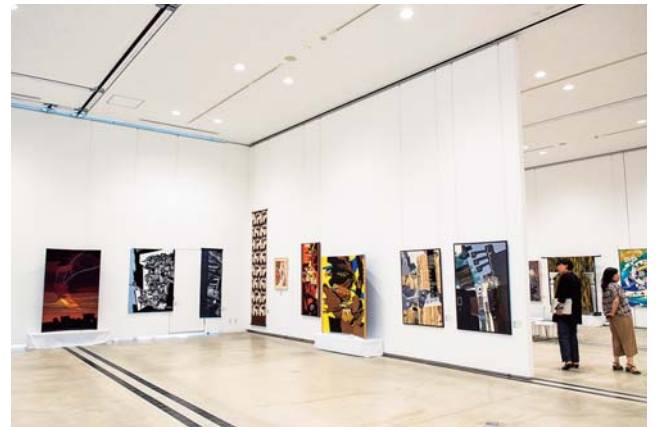
パネルディスカッション



第1回ギャラリートーク



第2回ギャラリートーク





出品リスト

No.	作家名	作品名	制作年	技法・形状 (cm)	出品歴	所蔵先
染の美を求めて						
1	鈴田照次	型絵染着物「雨文」	1968 (昭和43)		第5回伝統工芸染織展(「雨紋」として出品)	鈴田滋人氏
2	鈴田照次	型絵染着物「群鶴」	1971 (昭和46)		伝統工芸第8回日本染織展	鈴田滋人氏
3	鈴田照次	木版摺更紗着物 袖「麦穂文」	1977 (昭和52)		第24回日本伝統工芸展	鈴田滋人氏
4	鈴田照次	木版摺更紗着物「山果鳥文」	1980 (昭和55)		第27回日本伝統工芸展	鈴田滋人氏
5	鈴田照次	型絵染帯「琉球松風景」	1968 (昭和43)	長さ/385 幅/32.8		鈴田滋人氏
6	鈴田照次	木版摺更紗帯「菓果文」	1978 (昭和53)	長さ/430.5 幅/30.7		鈴田滋人氏
7	鈴田照次	木版摺更紗着物「間の空」	1991 (平成3)		第26回西部工芸展 正会員賞	作者蔵
8	鈴田照次	木版摺更紗着物「早春の花茎」	1992 (平成4)		第29回日本伝統工芸染織展文化庁長官賞	作者蔵
9	鈴田照次	木版摺更紗着物「儂花崗」	2011 (平成23)		第58回日本伝統工芸展	作者蔵
10	鈴田照次	木版摺更紗着物「紫宴」	2014 (平成26)		第61回日本伝統工芸展	作者蔵
11	鈴田照次	木版摺更紗帯「桃果文」	2009 (平成21)	長さ/534.4 幅/34.4		作者蔵
12	鈴田照次	木版摺更紗帯「涼雅」	2012 (平成24)		第47回西部伝統工芸展	作者蔵
資料	鈴田照次	デザイン帖No48より	1976 (昭和51) 12月			鈴田滋人氏
資料	鈴田照次	デザイン帖No49より	1977 (昭和52) 12月			鈴田滋人氏
資料	鈴田照次	「群鶴」関連スケッチ				鈴田滋人氏
資料	鈴田照次	「山果鳥文」関連 スケッチ 下図				鈴田滋人氏
資料	鈴田照次	「麦穂文」関連スケッチ				鈴田滋人氏
資料	鈴田照次	「琉球松風景」関連 琉球見聞画帖				鈴田滋人氏
資料	鈴田照次	「菓果文」関連スケッチ				鈴田滋人氏
書籍	鈴田照次	「染織の旅 源流を訪ねて」(株芸神堂)	1969 (昭和44)			鈴田滋人氏
書籍	鈴田照次	「染織の旅」(株芸神堂)	1972 (昭和47)			佐賀大学美術館
資料	鈴田照次	デザイン帖No48より	1976 (昭和51) 12月			鈴田滋人氏
資料	鈴田照次	デザイン帖No49より	1977 (昭和52) 12月			鈴田滋人氏
資料	鈴田照次	「早春の花茎」関連スケッチ				鈴田滋人氏
資料	鈴田照次	「儂花崗」関連 制作工程スケッチ、デザイン、版木、設計図				鈴田滋人氏
資料	鈴田照次	「紫宴」関連 制作工程 スケッチ、デザイン、版木、設計図				鈴田滋人氏
資料	鈴田照次	「桃果文」関連スケッチ				鈴田滋人氏
資料	鈴田照次	展示作品関連スケッチ ふきのとう、金魚、桃				鈴田滋人氏
佐賀大学染色教室						
13	城 秀男	豊	1967 (昭和42)		第10回日展 特選	佐賀大学美術館
14	城 秀男	妖異な円	1974 (昭和49)		改組第6回日展	佐賀大学美術館
15	小川泰彦	不知火の有明	1978 (昭和53)		改組第10回日展	佐賀大学美術館
16	田中嘉生	解ける	1982 (昭和57)		第14回日展	佐賀大学美術館
17	田中嘉生	卯月の頃Ⅱ	2014 (平成26)		改組新第1回日展 特選	佐賀大学美術館
写真 (パネル)		ある日の染色教室前	1973 (昭和48)	頃		佐賀大学美術館
写真 (パネル)		染色教室・研究会	1975 (昭和50)	頃		佐賀大学美術館
写真 (パネル)		城秀男退官記念展-佐賀県立美術館前	1977 (昭和52)			佐賀大学美術館
写真 (パネル)		佐賀空港のためのパネルを制作する小川泰彦 手伝う田中嘉生と当時の染色教室の学生-佐賀大学にて	2007 (平成19)			佐賀大学美術館
結成35周年 佐賀県染織作家協会						
18	青山幸子	鹿島錦ハンドバッグ「きざなみ」	1965 (昭和40)	12×21×3		作者蔵
19	青山幸子	鹿島錦 扇入れ「亀甲紋」	1973 (昭和48)	6×35		作者蔵
20	入来英成	炎	1989 (平成元)	型絵染屏風		作者蔵
21	入来英成	season (連作Ⅱ)	2015 (平成27)	型絵染 パネル		作者蔵
22	上野亜紀	かたばみ	2009 (平成21)	ろうけつ染 帯		作者蔵
23	上野亜紀	夏の夜	2007 (平成19)	しほり染 タベストリー		作者蔵
24	浦郷京公	舞浮立屏風	2017 (平成29)	型絵染 屏風		作者蔵
25	浦郷京公	額縁「浮立1」	2014 (平成26)	型絵染		作者蔵
26	太田京子	伸びる芽	2014 (平成26)	ろうけつ染 パネル		作者蔵
27	太田京子	静寂な夜に	2016 (平成28)	ろうけつ染 パネル		作者蔵
28	大庭敬子	浅春の颯	2015 (平成27)	縫いしほり染 タベストリー		作者蔵
29	大庭敬子	命あつての物種	2010 (平成22)	縫いしほり染 タベストリー		作者蔵
30	岡崎繁代	佐賀錦 刀袋「清籟」	2016 (平成28)	草木染		作者蔵
31	岡崎繁代	佐賀錦 袋「春がすみ」	2017 (平成29)	草木染		作者蔵
32	緒方義彦	白い傘 (Casablanca)	2017 (平成29)	木版糊染染飾布 (cotton)		作者蔵
33	緒方義彦	modern times - 望 -	2014 (平成26)	和紙型絵染 (鍋野和紙)		作者蔵
34	小川泰彦	思い出スイス	2002 (平成14)	ろうけつ染		作者蔵
35	小川泰彦	朝の海	2016 (平成28)	ろうけつ染		作者蔵
36	倉崎照美子	型絵染 四つ身着物「彩」	1992 (平成4)			作者蔵
37	倉崎照美子	型絵染 帯「すいかずら文」	2010 (平成22)	型絵染 糊防染		作者蔵
38	生島悦子	逆上がり できたよ	2017 (平成29)	型絵染 パネル		作者蔵
39	生島悦子	蝶になったよ	2016 (平成28)	型絵染 パネル		作者蔵
40	鈴田 浩	楠濃型絵染「樹想」	2011 (平成23)	型絵染 パネル		作者蔵
41	鈴田 浩	楠濃型絵染「松葉の万華鏡」	2017 (平成29)	型絵染 タベストリー		作者蔵
42	副島佳奈子	疾走る	2007 (平成19)	ろうけつ染 パネル		作者蔵
43	副島佳奈子	ぼらの小路	2004 (平成16)	ろうけつ染 帯		作者蔵
44	蔵楽瑞恵	風に乗って	2017 (平成29)	絹地に型染 屏風		作者蔵
45	蔵楽瑞恵	曳山巡行	2009 (平成21)	絹地に型染、パネル		作者蔵
46	永石千賀子	やっとうみつけた私Ⅰ	2017 (平成29)	絹地に型染 屏風		作者蔵
47	永石千賀子	やっとうみつけた私Ⅲ	2017 (平成29)	染め・織り・縫い パネル		作者蔵
48	中島節子	型絵染 帯「蔵文」	2006 (平成18)	360×31		作者蔵
49	中島節子	笹の葉さらさら	2015 (平成27)	型絵染 着物		作者蔵
50	長谷川和子	春の訪れ	2016 (平成28)	型絵染 パネル		作者蔵
51	長谷川和子	夏の訪れ	2010 (平成22)	型絵染 パネル		作者蔵
52	馬場崎進	草木染 額「桜花」	2003 (平成15)			作者蔵

No.	作家名	作品名	制作年	技法・形状 (cm)	出品歴	所蔵先
53	馬場崎進	草木染着物「縦紋」	2006 (平成18)			作者蔵
54	山口けい子	型絵染着物「折鶴蘭文」	2015 (平成27)			作者蔵
55	山口けい子	花文	2017 (平成29)	型絵染 タベストリー		作者蔵
56	山口弘子	野積み	2015 (平成27)	型絵染 パネル		作者蔵
57	山口弘子	罽子	2017 (平成29)	型絵染 タベストリー		作者蔵
58	山下常子	細胞分裂	2015 (平成27)	型染 タベストリー		作者蔵
59	山下常子	天空に舞う花精	2017 (平成29)	型絵染 タベストリー		作者蔵
60	吉田泰子	向かい干支一紋	2015 (平成27)	染織デザイン「掛軸」		作者蔵
61	吉田泰子	みちくさ	2015 (平成27)	描き 着物		作者蔵
62	渡邊成樹	ある日の阿蘇	2017 (平成29)	ろうけつ染 屏風		作者蔵
63	渡邊成樹	晩秋日暮	2016 (平成28)	ろうけつ染 屏風		作者蔵
未来へのかけはし 佐賀大学染色教室2017						
64	鳥谷さやか	軌跡の行方	2009 (平成21)	蠟染め シルクスクリーン		作者蔵
65	鳥谷さやか	断片 I	2009 (平成21)	蠟染め シルクスクリーン		作者蔵
66	吉中美遥	こもっていた	2016 (平成28)	蠟染め		作者蔵
67	吉中美遥	往く	2016 (平成28)	蠟染め		作者蔵
68	内田有美	六月の華	2016 (平成28)	蠟染め		作者蔵
69	内田有美	立冬	2016 (平成28)	蠟染め		作者蔵
70	山口陽菜子	追憶	2015 (平成27)	蠟染め		作者蔵
71	青木かのん	もっと もっと	2016 (平成28)	蠟染め		作者蔵
72	青木かのん	るんちゃんの浴衣	2016 (平成28)	蠟染め		作者蔵
73	南里成美	じろり	2016 (平成28)	蠟染め		作者蔵
74	南里成美	potato	2017 (平成29)	蠟染め		作者蔵
75	池田大地	ミナト	2017 (平成29)	蠟染め		作者蔵
76	増本瑠子	ひさかたの	2017 (平成29)	蠟染め		作者蔵
未来へのかけはし 地域に広がる染の文化						
77	池田早苗	型絵染着物「唐おがたま」				作者蔵
78	池田光子	桶洗染「クレマチス」		型染 タベストリー		作者蔵
79	伊東公子	型絵染飾布「すずしろの花」		138×45		作者蔵
80	小田三津江	収穫の季(しゅうかくのとき)		型絵染		作者蔵
81	小柳孝子	型絵染着物「おしろい花紋」				作者蔵
82	久原方寿美	型絵染飾布「立葵」		154×45		作者蔵
83	桑田とも子	生半麻地型絵染「ancient の種」		103×42		作者蔵
84	梶原利伊子	柘榴果皮による絞染		絞染		作者蔵
85	川崎民恵	希望の泉		型染 タベストリー		作者蔵
86	志戸朋子	藍間		昼夜織 タベストリー		作者蔵
87	杉原朝美	秋の訪れ		型絵染 帯		作者蔵
88	上瀧順子	型絵染バッグ「山ぼうし」		35×31		作者蔵
89	園田孝子	型絵染バッグ「刺子地鳳梨文様」		30×40		作者蔵
90	嵩 浩子	晩夏の陽(おそなつのひかり)		型絵染		作者蔵
91	竹内小枝	草木染織着物「夕映え」				作者蔵
92	武部貴美子	型絵染飾布「どくだみ文様」		型絵染		作者蔵
93	富村隆子	絞り飾布「本藍染絞」		タベストリー		作者蔵
94	中島律子	桶洗染「ゆい」		型染 タベストリー		作者蔵
95	西田多恵子	カサブランカ		型絵染 帯		作者蔵
96	原田都巳子	型絵染飾布「野いちご」				作者蔵
97	橋口眞智子	染額「春の森」		描き染		作者蔵
98	橋本洋子	運〜追憶		型紙摺・手描併用		作者蔵
99	松尾鏡子	仮仕立て着物「雪華の舞」		淡灰地 菱綾いちご文綴風 浮織殺熨斗目(染) 渋木・矢車・柘榴・刈安		作者蔵
100	松尾鏡子	薫風		緑地 欄縹緋綾(解織) 佐志葛布帯地(染) 渋木・藍・刈安・ゲレップ・柘榴		作者蔵
101	松本幸子	ZAKURO さくろ文様		型絵染飾布		作者蔵
102	峰松アキ子	散歩		型絵染・型紙 スタンド		作者蔵
103	峰松洋子	恵みの色		草木染織 ストール(染) つた・赤シソ・よもぎ		作者蔵
104	諸岡真知子	型染帯「笹」		500×37		作者蔵
105	山崎慶子	花てまり		型染 タベストリー		作者蔵
106	山崎こずえ	型絵染飾布「HAKUSAI (GRACE)」		205×41		作者蔵
107	山下敏江	恵みの色		麻と大麻の間仕切り、織(四枚吉野)		作者蔵
108	山本由貴子	独染文様「こまや旗」		型紙摺		作者蔵
109	吉原美恵子	型絵染飾布「弦之月」		150×89		作者蔵
110	大塚利香子	佐賀錦「襷紙入れ」		10×16×2		作者蔵
111	夏秋明美	佐賀錦「額」		32×41		作者蔵
112	西村慶子	佐賀錦「襷紙入れ」		11×17×2		作者蔵
113	内川由美	佐賀錦「額」		22×37		作者蔵
114	西村 歩	佐賀錦「額」		21.5×31		作者蔵
115	大石勝子	佐賀錦「大笛入れ」		10.5×55×6		作者蔵
116	川島加代子	佐賀錦「刀袋」		15×60×5		作者蔵
117	竹下てい子	佐賀錦「みやび袋」		14×20×16		作者蔵
118	坂井啓子	佐賀錦「仲よし(立雛)」		25×30×43		作者蔵
119	中島春美	佐賀錦「バッグ」		7.5×18×22		作者蔵
120	巖川敦子	佐賀錦「バッグ」		12×21×26		作者蔵
121	浦川ヒロヨ	蟹牡丹 縁二重雷文		鍋島緞通		作者蔵
122	中村由子	花唐草文緞通「青空」		緞通		作者蔵
123	百崎正子	花唐草文緞通 座布団「夏空」		緞通		作者蔵
124	木下 真	華牡丹に松皮文様縁二重雷文		鍋島緞通		作者蔵
125	木下由紀子	今宵の月		鍋島緞通 額装		作者蔵

## たたずむ女性たち—所蔵品にみる女性像

### 《展覧会概要》

「女性像」をテーマにした収蔵品を紹介する展覧会。西洋画では石本秀雄、久富邦夫、村岡平蔵、深草廣平、日本画では岩永京吉、彫刻では山本民二と、本学旧教員および佐賀県出身画家らがそれぞれの視点でとらえた女性像を展示した。

《会期》平成29 (2017) 年10月17日 (火)～平成30 (2018) 年3月25日 (日)

《開館日数》128日間

《会場》特別展示室

《主催》佐賀大学美術館

《展示構成》絵画4点、日本画1点、彫塑2点、素描1点 計8点

《入館者数》4,163人

《広報物》チラシ、ポスター、外看板、HP、FB

《配布資料》チラシ、目録

《関連事業》ワークショップ

「おひなさまをつくろう!」

日時：2月18日(日) 第1部10:00～ 第2部14:00～

会場：佐賀大学美術館 1階

担当学芸員によるギャラリートーク

第1回 「一緒に見よう!—岩永京吉『裸婦』にみる女性像の魅力」

日時：平成29年11月26日(日)

第2回 「佐大教員の女性像」

日時：平成29年12月24日(日)

第3回 「佐賀大学ダイバーシティ推進室合同企画!」

日時：平成30年1月28日(日)

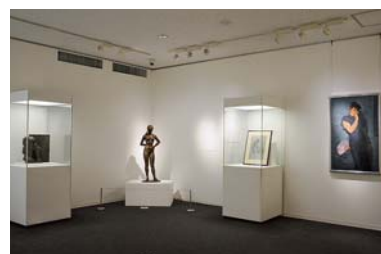
第4回 「表現された『女性』たち—モデルと画家」

日時：平成30年3月25日(日)

※いずれも 15:00～



チラシ



出品リスト

No	作家名	作品名	制作年	寸法 (cm)	素材	所蔵先
1	村岡平蔵	若いからだ	1975 (昭和50) 年代	50.2×73.2	油彩・カンヴァス	佐賀大学美術館
2	村岡平蔵	かがみ	1984 (昭和59)	50.2×73.2	油彩・カンヴァス	佐賀大学美術館
3	岩永京吉	裸婦	1963 (昭和38)	136×90	日本画・岩絵具	佐賀大学美術館
4	深草廣平	婦人像	1989 (平成元)	162×130.5	油彩・カンヴァス	佐賀大学美術館
5	久富邦夫	扇	1940 (昭和15)	116.6×72.7	油彩・カンヴァス	佐賀大学美術館
6	石本秀雄	パリのモデル	1964 (昭和39) 頃	63.3×48.2	コンテ・紙	佐賀大学美術館
7	山本民二	暦年		117.5×43×26.7	石こう	佐賀大学美術館
8	山本民二	無題	1979 (昭和54)	46.5×40×26.1	FRP	佐賀大学美術館



第2回ギャラリートーク



第3回ギャラリートーク



ワークショップ



ワークショップ

## 2. 展示記録（企画申請）

### 地域の文化財群としての小城鍋島文庫蔵書展

小城鍋島文庫は、小城藩の藩主鍋島家と藩校より伝来した、佐賀大学附属図書館の所蔵する約6,400点に及ぶ典籍と文書からなるコレクション。本展ではその一部である典籍15点を展示したほか、解題と一部の画像をパネルとして紹介。最終日にはシンポジウム「肥前鍋島家の文雅」が開催された。

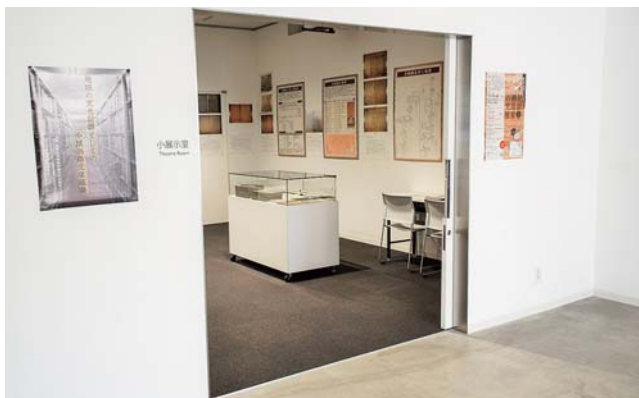
《会期》平成29（2017）年4月28日（金）～5月14日（日）

《開館日数》15日間

《会場》小展示室

《主催》佐賀大学地域学歴史文化研究センター／小城鍋島文庫研究会

《後援》九州中国学会



### 発掘された佐賀2017—佐賀県発掘調査成果展—

平成27年度から28年度までに佐賀県内で発掘調査された12遺跡の成果発表展。佐賀県教育委員会と佐賀大学の共同で開催した。中近世の城館跡をはじめ、徳川家康の内陣跡、唐津窯跡など多様な考古資料を展示した。会期中、「発掘された佐賀2017—佐賀県発掘調査速報—」の関連調査報告会が開催された。

《会期》平成29（2017）年7月7日（金）～7月16日（日）

《開館日数》9日間

《会場》ギャラリー1

《主催》佐賀県教育委員会／佐賀大学地域学歴史文化研究センター／佐賀大学全学教育機構



## 芸術表現基礎・地域デザイン基礎 成果発表展

本学の芸術地域デザイン学部1年生116名が「芸術表現基礎」「地域デザイン基礎」の授業で取り組んだ制作や活動の成果として、およそ500点の作品を発表した。

「彫刻」「絵画」「デザイン」「フィールドワーク」「工芸マネジメント」5つのテーマを設定し、デッサンから焼き物まで多様な作品を展示した。更にオープンキャンパスに合わせ、学生によるギャラリートークも実施された。



《会期》平成29(2017)年7月22日(土)～8月10日(木)

《開館日数》17日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ

《主催》佐賀大学芸術地域デザイン学部



## 深川善次先生と教え子達展

本学で西洋画を教えた元教授、深川善次氏の作品を中心に、教え子やゆかりの作家の作品を展示した。会期中にはギャラリートークも行われ、佐賀県の美術界及び教育界の振興・発展に尽力した深川氏の功績について、多くの方々に認識される機会となった。



《会期》平成29(2017)年8月16日(水)～8月20日(日)

《開館日数》5日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ

《主催》「深川善次先生と教え子達展」実行委員会/佐賀西高等学校美術部OB会



## 第8回 璞友会展

佐賀県内で書や水墨画を学んでいる「璞友会」が定期的に行っている展覧会。当館で開催されるのは今回で3回目となる。本年度は指導者を含めた22名による、65点の書作・水墨画を展示した。

《会期》平成29(2017)年10月17日(火)～10月22日(日)  
《開館日数》6日間  
《会場》ギャラリー1、ギャラリー2  
《主催》璞友会



## 平成29年度 JA 共済小・中学生第53回書道・第43回交通安全ポスターコンクール

JA 共済が文化支援事業として毎年実施している全国規模のコンクールの入賞作品展。

当館では応募された書作品およびポスターの中から、入選・入賞を果たした324点を展示した。

《会期》平成29(2017)年10月26日(木)～11月5日(日)  
《開館日数》10日間  
《会場》ギャラリー1、ギャラリー2  
《主催》農業協同組合/全国共済農業協同組合連合会佐賀県本部  
《後援》佐賀県/佐賀県教育委員会/佐賀県警察本部/佐賀県農業協同組合中央会/NHK 佐賀放送局/サガテレビ/NBC ラジオ佐賀/エフエム佐賀/佐賀新聞社/日本農業新聞



## 佐賀大学美術・工芸課程 第59回 総合展

本学の文化教育学部美術・工芸課程の3年生を中心に運営される、伝統ある学生主体の総合美術展。当館での開催は今回が5回目。西洋画、日本画、彫塑、陶芸、染色、木工、デザインと専攻の枠を超えた様々な作品を展示したほか、来場者参加型のモザイクアート作品を制作するワークショップを行った。

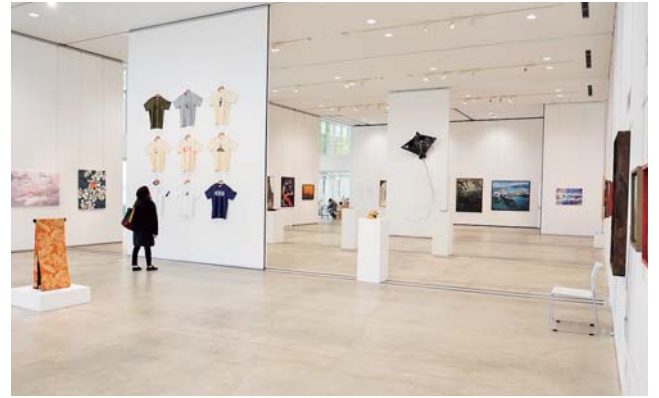


《会期》平成29(2017)年11月10日(金)～11月19日(日)

《開館日数》9日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、小展示室

《主催》第59回総合展実行委員会/佐賀大学文化教育学部美術・工芸課程/佐賀大学芸術地域デザイン学部



## 佐賀大学教育学部特設美術科(36入)卒業50周年展

佐賀大学特別教科教員養成課程の36期入学生らによる卒業50周年を記念した展覧会。卒業後、各々の道を歩んでいた11名の有志が母校に集結し、油彩、アクリル、彫刻作品など28点を展示した。

《会期》平成29(2017)年11月23日(木・祝)～12月3日(日)

《開館日数》10日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2

《主催》佐大特美卒業50周年展

《後援》佐賀大学美術科同窓会





## FRONT LINE 2017

コンテンツ創生を目指す人々の表現と陶冶の契機として企画されたイベント。第一線で活躍するクリエイターにより、ドローン、VR、Unity、モーションキャプチャ、CGアニメーションなど様々なジャンルの作品やデモリールが公開され、ワークショップ、セミナー等を通して、参加者の交流や研鑽が図られた。



《会期》平成29(2017)年11月29日(水)～12月3日(日)  
《開館日数》5日間  
《会場》スタジオ、小展示室  
《別会場》佐賀大学総合研究1号館、大学会館多目的ホール  
《主催》佐賀大学芸術地域デザイン学部  
《共催》佐賀大学クリエイティブ・ラーニングセンター  
《後援》6者協定



## 第58回 佐賀県学童美術展

佐賀県内の園児および小・中学生が授業中に制作した絵画、デザイン、線描を計645点展示した。小・中学生は学校、各地区の審査、そして本部審査で特選を受賞した作品が展示され、会期中は当館スタジオで表彰式も行われた。会期中は多くの家族連れが来館した。

《会期》平成29(2017)年12月6日(水)～12月10日(日)  
《開館日数》5日間  
《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ  
《主催》佐賀県造形教育研究会  
《後援》佐賀県教育委員会



## 佐賀大学教育学部附属特別支援学校 第2回 児童生徒作品展

本学の附属特別支援学校が、日頃の活動を周知するとともに、鑑賞による情操の学習に取り組むことを目的とし、企画した作品展。小学部から高等部までの児童・生徒59名と教員数名による水彩画や立体作品、紙人形を使ったコマ撮りアニメ、就労訓練で制作した作業製品、学習の様子を紹介するパネル等を展示した。

《会期》平成30(2018)年1月6日(土)～1月12日(金)

《開館日数》6日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2

《主催》佐賀大学教育学部附属特別支援学校



## 第33回 佐賀県高等学校美術教師作品展

### 第7回 佐賀県高等学校美術科授業生徒作品展「これが高校美術だ！」

佐賀県内の高校で美術を教える教師25名による油彩やデザイン、染色、立体作品など31点を展示した。さらに、高校で美術を学ぶ意義を一般に伝えるべく、県内10校から高校生の授業作品を出展した作品展「これが高校美術だ!」を併催。老若男女の隔てなく多彩な作品を発表した。

《会期》平成30(2018)年1月17日(水)～1月21日(日)

《開館日数》5日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ

《主催》佐賀県高等学校教育研究会芸術部会美術部会



第42回 佐賀県高等学校書道教師書作展  
第42回 佐賀県高等学校臨書展

佐賀県内の高校で書道を担当する教師が授業研究会の他に、年に一度の作品発表の場として開催している展覧会。日頃の研鑽の成果として35名が65点の書や掛軸を展示した。

さらに、高校書道部、選択授業の生徒の学習成果の一端として県高等学校生徒臨書展の優秀作品274点を展示した。

《会期》平成30(2018)年1月31日(水)～2月4日(日)

《開館日数》5日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ

《主催》佐賀県高等学校教育研究会書道部会

《共催》佐賀県高等学校文化連盟書道専門部

《後援》佐賀県書道教育連盟



平成29年度 佐賀大学文化教育学部学校教育課程音楽専修 卒業演奏会

本学の文化教育学部学校教育課程音楽専修の学生主導による実技試験を兼ねた卒業演奏会。4年間の学びの成果として、4名の学生が、それぞれソプラノ独唱、テノール独唱、ピアノ独奏を披露した。

《会期》平成29(2017)年2月11日(日)

《開館日数》1日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ

《主催》佐賀大学文化教育学部学校教育課程音楽専修



## 第十八回 佐賀大学卒業書作展

佐賀大学文化教育学部国語科（書写）学生の卒業書作展。例年美術館2階の小展示室で開催されていたが、今年度はより多くの人に、書作品に親んでもらうため1階のギャラリー1で開催した。4年生2名の作品を中心に、指導教員や在学生の作品など30点を展示した。

《会期》平成30（2018）年2月15日（木）～2月18日（日）

《開館日数》4日間

《会場》ギャラリー1

《主催》佐賀大学文化教育学部学校教育課程教科教育選修国語（書写）教育分野



## 第62回 佐賀大学文化教育学部美術・工芸課程卒業制作展 第24回 佐賀大学大学院地域デザイン研究科芸術デザインコース修了制作展

本学で美術・工芸を学んできた学生38名、院生8名による、大学生活の集大成となる作品展。日本画、西洋画、彫塑、デザイン、窯芸、漆・木工芸、染色工芸、美術理論・美術史の8専攻から出品された多種多様な作品44点・論文10点を展示した。

《会期》平成30（2018）年2月22日（木）～3月4日（日）

《開館日数》10日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、小展示室

《別会場》佐賀大学芸術地域デザイン学部3号館2階

《主催》佐賀大学文化教育学部美術・工芸課程 / 佐賀大学大学院地域デザイン研究科



## 佐賀大学デジタル表現技術者養成プログラム第8期生修了作品展「电脑芸術展」

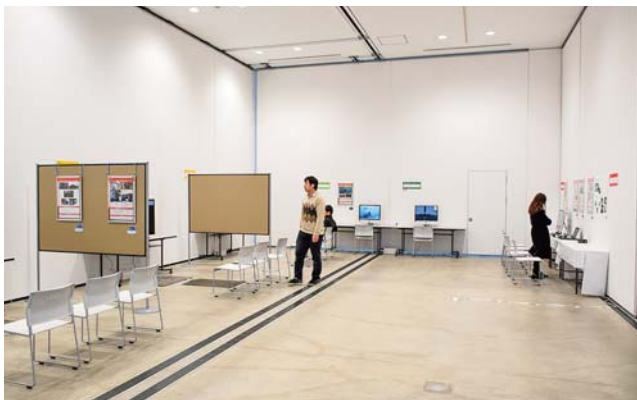
本学で「デジタル表現技術者養成プログラム」を受講した学生による修了作品展。2年間の履修期間の締めくくりとして制作された修了研究作品から審査で選ばれた、アニメーション、ショートムービー、VRコンテンツなど、様々なデジタルアート作品17点を展示した。学生達の感性と様々な表現方法が伝わる展覧会となった。

《会期》平成30(2018)年3月8日(木)～3月11日(日)

《開館日数》4日間

《会場》ギャラリー1、2、小展示室

《主催》佐賀大学クリエイティブラーニング・ラーニングセンター/コンテンツ共創ラボ



## 佐賀大学大学院工学系研究科都市工学専攻・理工学部都市工学科 修士制作・卒業制作展

本学の理工学部都市工学科で学んだ学部4年生と大学院2年生の集大成である卒業制作・修士制作展。7回目となる今回は建築模型をはじめ体験型の作品、プレゼンボードなどを展示した。

《会期》平成30(2018)年3月13日(火)～3月16日(金)

《開館日数》4日間

《会場》スタジオ

《主催》佐賀大学大学院工学系研究科都市工学専攻/佐賀大学理工学部都市工学科



## 〔貸館〕

### DRAWLING～描く系譜～小木曾 誠とその周辺展

DRAWLINGとはDRAW（描く）とLINE（線）を混ぜ合わせた造語。佐賀県立美術館で開催される「ホキ美術館展」に連動して企画された。本展では小木曾誠氏の新作25点のほか、佐賀在住コレクターによるコレクション、本学出身の若手作家の写実画など全77点が展示され、初日と最終日には出品者15名によるギャラリートークも開催された。



《会期》平成29（2017）年4月1日（土）～4月16日（日）

《開館日数》14日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ

《主催》サガテレビ

《協力》佐賀大学芸術地域デザイン学部（西洋画専攻）

《協賛》美川眼科



## 〔プロムナード使用〕

### 佐賀大学アカペラサークル「Score!」によるミニライブ

本学の学生音楽サークルが4日間、昼休みに新生に向けてミニライブを行った。サークル内の複数のグループが日替わりで「世界に一つだけの花」など5曲を披露し、日頃の活動を紹介した。

《日時》平成29(2017)年4月19日(水)～21日(金)、27日(木)

12:00～12:30

《主催》佐賀大学アカペラサークル「Score!」



### ラテンダンスイベント

芸術地域デザイン学部のコース授業の一環であるフィールドワーク・アクティビティ、及び日本人学生と留学生との交流促進を目的として企画された。

講師にマルセロ・ステラ氏、宮田一樹氏を招き、約40名の参加者が軽快な楽曲に乗せて体を動かし、ラテンダンスやフィットネスを通して交流を図った。

《日時》平成29(2017)年4月30日(日) 11:00～15:00

《主催》芸術地域デザイン学部(ステファニー・アン・ホートン教室)

《協力》NPO 法人ティエンポ・イベロアメリカノ



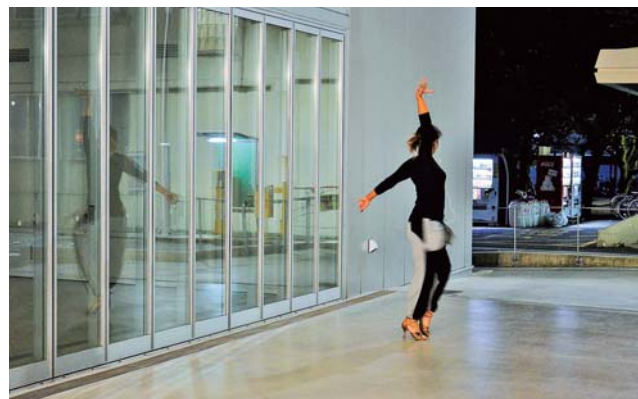
## 佐賀大学競技ダンス部 部活動練習

競技ダンス部が練習場としているサークル会館3階を学祭のため他サークルと共有することとなり、臨時の練習場としてプロムナードを利用した。

第43回北部九州学生競技ダンス大会、第53回全九州秋季学生競技ダンス大会に向け、プロムナードのガラス面を鏡に見立てて練習を行った。

《日時》平成29(2017)年10月10日(火)、17日(火)、20日(金)、31日(火) 18:30~20:00

《主催》佐賀大学競技ダンス部





### 3. 実習・研修

#### 概要

平成29年度は学芸員資格取得希望者1年生50人2年生19人を受け入れ、美術館学芸員が講師となり、監視実習を館内で行った。また、九州産業大学主催の「著作権」に関する研修会が本学を会場として行われた。

#### 博物館実習 監視実習

《内容》館主催事業を教材に、監視および来館者対応の実習を行った。

「塑像と素材—佐大の彫刻」

「佐賀大学と美協展」※2年生のみ

「新収蔵品展—官立佐賀師範の青春」

会期中、展示室内の作品、来館者、環境の保全を意識するとともに、来館者対応を行い、気付いたことをレポートにまとめた。

(実習生1人あたり60分×2回)

《期間》平成29(2017)年5月24日(水)～8月8日(火)

※説明会5月18日(木)

《参加者》69人



説明会



## 学芸員技術研修会〈著作権〉

《内容》 九州の各館で開催されている、九州産業大学主催による学芸員等の博物館関係者を対象とした研修会のうち、著作権についての研修会が本学を会場に行われた。

弁護士福井氏による「著作権を考えることは未来を創造すること」をテーマとした講演と、事前アンケートを基にした質疑応答形式の講義が行われ、著作権に関する知識や考え方、対応方法の啓発が図られた。

《講師》 福井健策氏（弁護士、ニューヨーク州弁護士、日本大学芸術学部客員教授）

《日時》 平成29（2017）年7月24日（月）13:00～17:00

《会場》 佐賀大学全学教育機構1号館3階

《参加者》 69名



## 4. 刊行・掲載・見学

### 〔刊行物〕

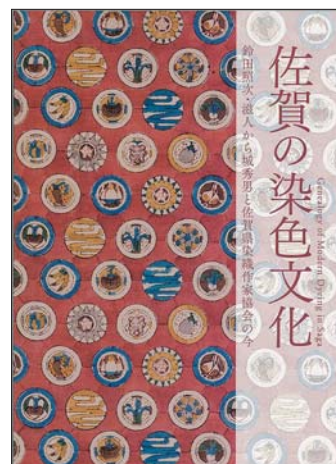
図録「佐賀の染色文化 鈴田照次・滋人から城秀男と佐賀県染織作家協会の今」

《概要》図録：展示概要/図版/出品リスト/参照文献

《仕様》A4版76ページ 4色刷

《発行部数》1200部

《発行日》平成29年8月24日



「佐賀大学美術館 平成28年度年報/紀要」

《概要》年報：館概要/沿革/組織図/平成28年度の活動

紀要：久富邦夫をめぐるふたつの企画展—「修業」と「創造」

大坪由季 (元佐賀大学美術館 学芸員/大隈重信記念館 学芸員)

《仕様》AB版44ページ 4色刷

《発行部数》500部

《発行日》平成29年11月30日



〔掲載紙・テレビ・ラジオ〕 平成29年度は総数で新聞等84件、TV・ラジオ15件が掲載・放送された。  
 ※本頁は館主催事業についての報道のみ抜粋。

- ・週刊ニュース5（4月3日 佐賀新聞）
- ・展覧会情報「塑像と素材—佐大の彫刻」（4月28日・30日、5月30日、6月28日 佐賀新聞）
- ・展覧会情報「佐賀大学と美協展」（4月28日・30日、5月13日・29日 佐賀新聞 / 5月25日 朝日新聞 / 6月2日 西日本新聞）
- ・歴史を俯瞰、若い感性凝縮 佐賀大学と美協展（5月5日 佐賀新聞）
- ・ニュースおかえり佐賀845「佐賀大学美術館の取り組み」（5月17日 NHK）
- ・美協100回展 次代へつなぐ記念展に（5月25日 佐賀新聞）
- ・「佐賀美術協会賞 歴代34点」（6月3日 西日本新聞）
- ・「美の矜持次代へ（下）芸術と添い遂げる」（6月9日 佐賀新聞）
- ・展覧会情報「平成28年度寄贈作品による新収蔵品展 緒方敏雄・久富邦夫・檜崎重視 官立佐賀師範の青春」（6月16日、7月10日 佐賀新聞）
- ・特美の礎築く 中央画壇で活動（7月4日 佐賀新聞）
- ・佐賀大美術館新収蔵品展 緒方や久富、樽崎ら（7月4日 佐賀新聞）
- ・展覧会情報「佐賀の染色文佐賀の染色文化～鈴木照次・滋人から城秀男と佐賀県染織作家協会の今」（9月6日 NHK）
- ・有明抄「染色と佐賀」（8月31日 佐賀新聞）
- ・染色の魅力語る 人間国宝・鈴木さんら3作家（9月4日 佐賀新聞）
- ・鈴木親子“競演”佐賀大美術館で染色展（9月5日 佐賀新聞）
- ・佐賀の染色文化展 人間国宝の作品も（9月5日 サガテレビ）
- ・鈴木父子の染色作品“競演”（9月24日 西日本新聞）
- ・ニュース「佐賀の染色文化」（9月25日 NHK）
- ・会派超え、多彩な美「佐賀の染色文化」展（9月26日 佐賀新聞）
- ・展覧会情報「たたずむ女性たち—所蔵作品にみる女性像」（10月17日、11月、12月26日、2月12日・27日 佐賀新聞）

## 〔掲載誌〕

誌名	発行	発行日
野田宇太郎顕彰会 会報 ことばらんどで野田宇太郎 展覧会評（執筆：佐々木奈美子）	野田宇太郎顕彰会	平成29年5月20日
月間アートコレクターズ2017年5月号 美術・工芸課程卒業・修了制作展（2016年度）	（株）生活の友社	平成29年5月25日
佐賀美術協会の100年 「佐賀大学と「美協展」—果てなく流れる川のほとりで」 （執筆：佐々木奈美子）	佐賀美術協会	平成29年7月28日
MOTEMOTE さが2017年8月号 「深川善次先生と教え子達展」	佐賀新聞文化センター	平成29年8月1日
文部科学教育通信 佐賀大学美術館特別企画展（執筆：後藤昌昭）	教育新社	平成29年9月25日
MOTEMOTE さが2017年11月号 「第59回 総合展」	佐賀新聞文化センター	平成29年11月1日
WASABI2017年11月号 「第59回 総合展」	（株）スイッチわさび編集部	平成29年10月23日
WASABI2018年2月号 「佐賀大学文化教育学部学校教育課程音楽専修卒業演奏会」	（株）スイッチわさび編集部	平成30年1月25日
WASABI2018年2月号 「美術・工芸課程卒業・修了制作展」	（株）スイッチわさび編集部	平成30年1月25日
MOTEMOTE さが2018年2月号 「佐賀大学文化教育学部学校教育課程音楽専修卒業演奏会」	佐賀新聞文化センター	平成30年2月1日

〔見学団体一覧〕 ※事前連絡および申告にて把握できた団体名称および人数。  
※参加者数に引率者を含む。

期日	団体名	人数
4月12日	「芸術創造Ⅱ」受講者	17
4月13日	「芸術創造Ⅱ」受講者	9
4月15日	長崎県立苓岐高等学校	9
4月15日	大人サークル	9
4月15日	長崎県立佐世保中央高等学校	16
4月28日	「大学入門科目Ⅰ」受講者	17
5月2日	「彫刻Ⅰa」受講者	7
6月16日	福岡県立糸島高等学校	47
6月17日	学佐賀龍谷学園 龍谷高等学園	55
7月11日	「ヘリテージマネジメント論」受講者	62
7月11日	「応用美術理論」「美術史Ⅰ」受講者	36
7月12日	「日本事情」留学生受講者	25
7月13日	福岡県立舞鶴高等学校	142
7月14日	佐賀県立佐賀農業高等学校	25
7月16日	佐賀大学経済学部「73期同窓会」	126
7月19日	福岡県立福岡高等学校	93
7月22日	佐賀大学工学系研究科 都市工学専攻 環アジア国際セミナー受講者	15
7月25日	「芸術表現基礎」「地域デザイン基礎」受講者	62
7月26日	学校法人津曲学園鹿児島高等学校	15
7月26日	鹿児島県立曾於高等学校	15
7月27日	「芸術表現基礎」「地域デザイン基礎」受講者	62
7月28日	「芸術表現基礎」「地域デザイン基礎」受講者	126
8月24日	長崎県立大村高等学校 PTA	18
8月27日	日本地衣類研究会	15
9月8日	日本画像学会	14
9月12日	デイサービスケアサポート晴寿	19
9月13日	デイサービスケアサポート晴寿	18
9月14日	デイサービスケアサポート晴寿	18
9月15日	デイサービスケアサポート晴寿	20
9月16日	デイサービスケアサポート晴寿	10
9月18日	デイサービスケアサポート晴寿	13
9月20日	佐賀県立伊万里高等学校	196
9月24日	デイサービスケアサポート晴寿	7

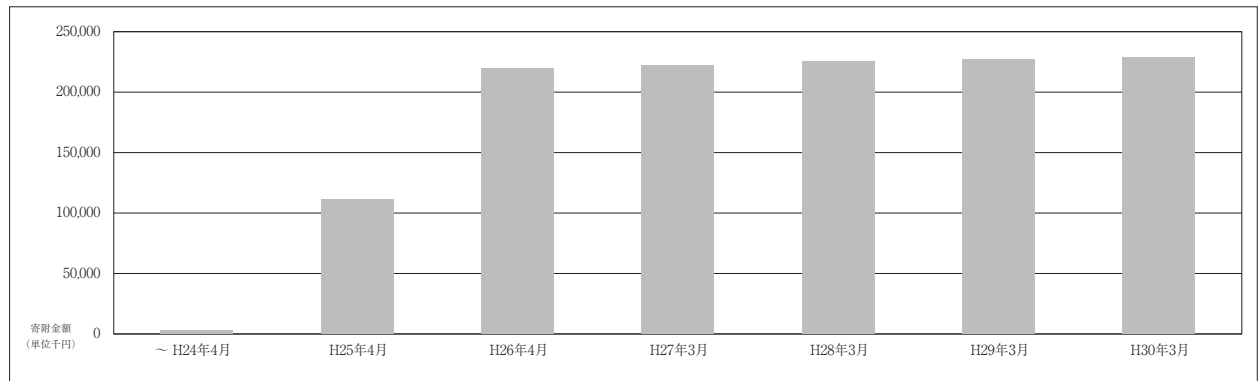
期日	団体名	人数
9月29日	佐賀県立武雄青陵中学校	124
10月4日	福岡県立光陵高等学校 PTA	27
10月5日	佐賀女子高等学校	8
10月17日	福岡県立筑前高等学校 PTA	97
10月18日	福岡県立小郡高等学校父母教師会	41
10月20日	循誘公民館講座受講者	22
10月20日	金曜会	11
10月24日	大阪大学日本史研究室	57
10月24日	福岡県立新宮高等学校	40
10月26日	福岡県立武蔵台高等学校	76
11月13日	九州地区国立大学教養教育実施組織会議 及び事務協議会	26
11月14日	学佐賀理容美容専門学校 アイ・ビービューティカレッジ	28
11月21日	佐賀大学秋短期留学プログラム（オーストラリア）	15
11月22日	佐賀大学同窓会文理学部卒業生	10
11月25日	佐賀大学ホームカミングデー	50
11月29日	九州国際情報ビジネス専門学校	17
12月2日	佐賀大学教育学部附属中学校	23
12月2日	佐賀市立城東中学校	10
12月6日	多久市立東原席舎東部校 前期3年生	48
12月6日	多久市立東原席舎中央校	55
12月9日	佐賀造形教育学習会	15
1月6日	放課後等デイサービスきらめき	19
1月10日	元培医事科技大学（台湾）	23
1月18日	「芸術表現A（西洋画）」受講者	18
1月31日	佐賀県立佐賀西高等学校	65
2月1日	佐賀県立佐賀商業高等学校	40
2月2日	佐賀県立佐賀商業高等学校	11
2月2日	学佐賀学園 佐賀学園高等学校	19
2月10日	長崎国際大学	34
2月20日	白石町立六角小学校	21
2月23日	学佐賀清和学園 佐賀清和高等学校	38
2月23日	本庄かたりペウォーキング	10

平成29年4月12日～平成30年2月23日

## 5. 寄附

### [美術館設置募金の経緯]

平成23年 6月 美術館設置募金 WG 設置  
平成24年 4月 美術館設置事業募金開始  
平成25年 6月 寄附者芳名帳を公開  
平成25年 6月 美術館規則の制定に伴い、美術館設置募金 WG を解散  
平成25年 9月 美術館に高額寄附者銘板を設置  
平成25年10月 美術館開館後も美術館設置事業募金を継続  
平成30年 3月 募金総額232,515,094円（平成30年 3月31日現在）



## 6. 職員の館外調査研究・研修等

佐々木奈美子

発行日：平成29年 7月28日

掲 載：佐賀美術協会の100年

目 的：寄稿「佐賀大学と「美協展」一果てなく流れる川のほとりで」

佐々木奈美子

発行日：平成29年 5月20日

掲 載：野田宇太郎顕彰会会報

目 的：寄稿「ことばらんどで野田宇太郎—市民文学館の展示を見て」

出口智佳子

日 時：平成29年11月25日

場 所：宮崎県立美術館アートホール

目 的：第97回九州藝術学会発表

「J. E. ミレイ《両親の家のキリスト》における風俗画的要素—作品受容をめぐって」

出口智佳子

発行日：平成29年11月13日

掲 載：西南学院大学博物館研究叢書キリスト教の祈りと芸術—装飾写本から聖画像まで—

目 的：寄稿「イギリスの宗教改革と英訳聖書」

出口智佳子

発行日：平成30年 3月15日

掲 載：西南学院大学博物館研究紀要第 6 号

目 的：論文「J. E. ミレイ《両親の家のキリスト》における風俗画的要素—作品受容をめぐって」

研究ノート「大学文書館における展示活動—西南学院史資料センターを事例として—」

## 7. 新収蔵作品

収蔵年	作家名	作家名_産地_E	作品名	作品名_E
2017	田中宗一	TANAKA, Sohichi	古湯の岩瀨（熊の川溪谷）	Iwabuchi; in Furuyu (Valley of Kumanokawa)
2017	田中宗一	TANAKA, Sohichi	清冽（くじゃくさぼてん）	Cool and Clear (Epiphyllum)
2017	田中宗一	TANAKA, Sohichi	牡丹	Peony
2017	田中宗一	TANAKA, Sohichi	紅葉	Autumn leaves
2017	中牟田佳彰	NAKAMUTA, Yoshiaki	鑄銅花器	Casting Copper Vase
2017	中牟田佳彰	NAKAMUTA, Yoshiaki	鑄銅花器	Casting Copper Basin marked with Rope
2017	中牟田佳彰	NAKAMUTA, Yoshiaki	鑄銅花器	Casting Copper Vase
2017	田中嘉生	TANAKA, Yoshio	解ける	Unknot
2017	田中嘉生	TANAKA, Yoshio	卯月の頃Ⅱ	Around April II



田中宗一〈清冽（くじゃくさぼてん）〉



田中宗一〈牡丹〉

分類	制作年(和暦)	制作年(西暦)	寸法(H×W×D)	素材	出品歴	寄贈者
西洋画	昭和39	1964	54×72	水彩・紙		酒井洋子氏
西洋画	昭和41	1966	71×53.5	水彩・紙		酒井洋子氏
西洋画	昭和44	1969	36.7×48.3	水彩・紙		酒井洋子氏
西洋画	昭和45	1970	36.8×48.5	水彩・紙		酒井洋子氏
工芸(金工)	昭和51	1976	30×24×20	ブロンズ		中牟田澄子氏
工芸(金工)	昭和60	1985	7.5×42.5×36	ブロンズ		中牟田澄子氏
工芸(金工)	昭和63	1988	30×25×20	ブロンズ		中牟田澄子氏
工芸(染色)	昭和57	1982	180×180	染色		田中嘉生氏
工芸(染色)	平成26	2014	180×125	染色		田中嘉生氏



中牟田佳彰《鑄銅花器》



田中嘉生《卯月の頃Ⅱ》



## 8. 作品修復・貸出

### 作品修復

対象作品：太宰治《久富君像》

作業期間：平成29年9月27日（水）～28日（木）

委託先：絵画修復 たけのした工房

#### 作業内容

##### \* 作業前の状態

- ・ 絵画層は亀裂・剥離・剥落が現れ、特に青色部分の定着が弱く損傷が顕著にみられた。細かな亀裂の端が剥離となりさらに剥落へと進み、動かすのも危険な状況であった。
- ・ 全体に薄く汚れがあり、ニス層はない。
- ・ 支持体の素材はキャンバスボードで、上下に反りがありやや裏面が膨らんでいた。側面の厚紙層がやや離れ、特にコーナーには潰れがあり、左下は折れ、右下はキャンバスとボード層が離れていた。

##### \* 保存修復処置内容

- ・ 処置前の状態を目視調査し、紫外線照射調査も行った。紫外線照射によって剥落部分には一部加筆が確認された。
- ・ 絵の具損傷部分に膠水を入れ、温めたコテで絵具層をゆっくと押さえ、剥離や亀裂を固着。絵画層の剥落部分には、充填を行い、周囲の表現に合わせ整形を行った。充填部分は、水彩絵具と樹脂絵具で補彩を行った。
- ・ 画面保護のため合成樹脂ニスを塗布。
- ・ 画面汚損はアンモニア水で除去。但し、脆弱な青色部分および裏面は刷毛のみでドライ除去を行った。
- ・ 支持体側面の紙層に、パラロイド B72（アセトン希釈）を筆で塗布、固着および補強をした。左下折れは戻した。

対象資料：久富君像 額縁

作業期間：平成29年12月15日（金）～平成30年1月31日（水）

委託先：絵画修復 たけのした工房

#### 作業内容

##### \* 作業前の状態

- ・ 木製の支持体に石膏装飾がなされ、その石膏部分に亀裂や欠落があった。また、アクリル板などの作品保護や吊金具もなく、展示に不向きな状態であった。

##### \* 保存修復処置内容

- ・ 表裏面の洗浄を水やエタノールで行い、亀裂部分滑落部分には膠水で固着。石膏装飾部分の欠落などは、エポキシ樹脂で重鎮固着。表面を樹脂絵の具で補彩後、ダンマル樹脂を塗布。
- ・ 額縁内側に作品保護の低反射アクリル板を設置、栗木材のライナーにて固定。ライナーの一部は、アクリル絵の具にて着彩。
- ・ 額縁内の作品固定のため、裏面に中性紙で保護のうえ、ポリカーボネート（中空複層パネル）で覆い、ステンレス製トンボにて留めた。吊り金具としてステンレス製金具も設置。

対象作品：筒井茂雄《風景》

作業期間：平成30年3月6日（火）～3月22日（木）

委託先：絵画修復 たけのした工房

作業内容

\*作業前の状態

- ・画布の支持体は経年劣化により脆弱、右上側面の約60mmが欠損し、左下側面に40mmの裂けがあった。画布を再張り込みしたと思われる釘穴跡、その際に生じたずれにより作品の側面が画面にまで現れている。
- ・湿度変化による画布の張りは失われ、表画面の亀裂に添い裏面にも凹凸が現れ、埃も蓄積していた。
- ・絵画層は前面に大きな亀裂が現れ、それに伴って皿状の反りがみられる。剥離や剥落もあり、剥離部分の下層から、別の絵画表現がみられる。絵画層は厚く固いが、画布の変化にとも立って損傷が現れていた。
- ・額縁にはヒートン等の金具はなく、裏板、アクリル板もない。

\*保存修復処置内容

- ・絵画層の剥離・剥落・亀裂などの損傷に、膠水を注して、シリコンシートで保護をし、その上から修復用コテで押さえ接着。
- ・画面の汚れは、灰汁（PH10）で、裏面の汚れは吸引で除去。
- ・画布の裂けや欠損部分に布を充てて補強し、側面を引っ張りながらステンレス製ステープラーを打ち込むことにより、画布の張りを戻した。
- ・絵画層の剥落部分は充填形成し補彩。画面保護のため、合成樹脂ニスを塗布。
- ・額縁の汚れを吸引で除いた。ステンレス製吊り金具を設置して、作品は裏面を中性紙で保護、ステンレス製T字金具で留めた。

## 作品貸出

「近代工芸の先駆者 豊田勝秋・その門人展」

場 所：九州芸文館

会 期：平成29年4月11日（火）～5月7日（日）

貸出作品：豊田勝秋《鑄銅瓶（糸目）》1966年

図録掲載：『豊田勝秋・その門人展』（九州芸文館発行）p.9

「生誕150年記念 藤島武二展」

場 所：練馬区立美術館 / 鹿児島市立美術館 / 神戸市立小磯記念美術館

会 期：平成29年7月23日（日）～9月18日（月・祝）

平成29年9月29日（金）～11月5日（日）

平成29年11月18日（土）～平成30年1月28日（日）

貸出作品：藤島武二《台湾娘》1933年

図録掲載：『生誕150年記念藤島武二展』（東京新聞）no. 127, p. 104

「肥前さが幕末維新博プレ企画展 山口亮一と佐賀美術協会の100年」

場 所：佐賀県立美術館

会 期：平成29年7月28日（金）～9月3日（日）

貸出作品：岡田三郎助《若き娘の顔》1913年

瀧一夫《萌黄釉角壺》1967年

図録掲載：『佐賀美術協会の100年』（佐賀美術協会編）p. 3, p. 126

「筑後の彫刻家展」

場 所：九州芸文館

会 期：平成29年9月2日（土）～9月24日（日）

貸出作品：緒方敏雄《女性立像》

## 9. 入館者一覧表

※数値に重複あり

展覧会	入場者数	会期	日数	主催	展示会場
DRAWLING 展～描く系譜～ 小木曾 誠とその周辺展	3,538	4月1日～4月16日	14	(株)サガテレビ	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
彫塑と素材－佐大の彫刻	2,636	4月21日～8月20日	103	佐賀大学美術館	特別展示室 ※観覧者実数
<美協100回展関連企画>佐賀大学と美協展	3,168	4月28日～6月11日	39	佐賀大学美術館	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
地域の文化財群としての小城鍋島文庫蔵書展	1,351	4月28日～5月14日	15	佐賀大学地域学歴史文化研究センター	小展示室
平成28年度寄贈作品による新収蔵品展	1,950	6月16日～7月16日	27	佐賀大学美術館	ギャラリー2、スタジオ
発掘された佐賀2017－佐賀県発掘調査成果展－	1,044	7月7日～7月16日	9	佐賀県教育委員会	ギャラリー1
芸術表現基礎・地域デザイン基礎 成果発表展	3,925	7月22日～8月10日	17	芸術地域デザイン学部	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
深川善次先生と教え子達展	946	8月16日～8月20日	5	同展実行委員会/ 佐賀西高校美術部OB会	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
佐賀の染色文化～鈴木照次・滋人から 城秀男と佐賀県染織作家協会の今	5,249	8月24日～10月9日	41	佐賀大学美術館	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、 特別展示室、小展示室
たたずむ女性たち－所蔵品にみる女性像	4,163	10月17日～3月25日	128	佐賀大学美術館	特別展示室 ※観覧者実数
第8回 瓊友会展	1,053	10月17日～10月22日	6	瓊友会	ギャラリー1、ギャラリー2
平成29年度 JA 共済小・中学生 第53回書道・第43回交通安全ポスターコンクール	1,478	10月26日～11月5日	10	農業協同組合/全国共済農業 協同組合連合会佐賀県本部	ギャラリー1、ギャラリー2
佐賀大学美術・工芸課程第59回 総合展	1,274	11月10日～11月19日	10	佐賀大学文化教育学部美術・ 工芸課程/芸術地域デザイン 学部	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、 小展示室
佐賀大学特設美術科(36入)卒業50周年展	1,454	11月23日～12月3日	10	佐大特美卒業50周年展	ギャラリー1、ギャラリー2
FRONT LINE2017	1,082	11月29日～12月3日	5	佐賀大学芸術地域デザイン学部	スタジオ、小展示室
第58回 佐賀県学童美術展	2,944	12月6日～12月10日	5	佐賀県造形教育研究会	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
佐賀大学教育学部附属特別支援学校 第2回 児童生徒作品展	425	1月6日～1月12日	6	佐賀大学教育学部附属特別支 援学校	ギャラリー1、ギャラリー2
第33回 佐賀県高等学校美術教師作品展 第7回 高校美術生徒作品展「これが高校美術だ!」	816	1月17日～1月21日	5	佐賀県高等学校教育研究会 芸術部会美術部会	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
第42回 佐賀県高等学校書道教師書作展 第42回 佐賀県高等学校臨書展	1,067	1月31日～2月4日	5	佐賀県高等学校教育研究会書 道部会	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
平成29年度 佐賀大学文化教育学部 学校教育課程音楽専修 卒業演奏会	150	2月11日	1	佐賀大学文化教育学部学校教 育課程音楽専修	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
第十八回 佐賀大学卒業書作展	362	2月15日～2月18日	4	佐賀大学文化教育学部学校教 育課程教科教育選修国語(書 写)教育分野	ギャラリー1
第62回文化教育学部美術・工芸課程卒業制作展 第24回地域デザイン研究科修了制作展	2,254	2月22日～3月4日	10	文化教育学部/佐賀大学大学 院地域デザイン研究科	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、 小展示室
佐賀大学デジタル表現技術者養成プログラム 第8期生修了制作展「電腦芸術展」	456	3月8日～3月11日	4	佐賀大学クリエイティブ・ラーニ ングセンター	ギャラリー1、ギャラリー2、小展示 室
佐賀大学大学院工学系研究科都市工学専攻 理工学部都市工学科 修士制作・卒業制作展	484	3月13日～3月16日	4	佐賀大学大学院工学系研究科 都市工学専攻/佐賀大学理工 学部都市工学科	スタジオ

平成29年4月1日～平成30年3月16日

### [年度別入場者実績]

※数値に重複なし

	総入館者数	うち有料入館者数	開館日数
平成25年度	27,167	0	125
平成26年度	40,780	2,652	254
平成27年度	37,965	0	281
平成28年度	38,474	0	291
平成29年度	34,718	0	285

展覧会報告書

# 「塑像と素材—佐大の彫刻」展

—展覧会報告と緒方敏雄、古賀忠雄について

佐賀大学美術館 紀要

2017

研究ノート

# 岩永京吉作品における 女性像の一考察

—佐賀大学美術館所蔵《裸婦》(1963)を中心に

## 展覧会報告書

# 「塑像と素材—佐大の彫刻」展

—展覧会報告と緒方敏雄、古賀忠雄について

今村真由美

佐賀大学美術館 学芸員

### 1. はじめに

「塑像と素材—佐大の彫刻」展（以下「塑像と素材展」）は、佐賀大学美術館にて、2017年（平成29年）4月21日～8月20日にかけて佐賀大学美術館主催で開催した。<sup>1</sup>

戦後、佐賀における彫塑（彫刻・塑像）分野の教員や作家の教育機関での本格的な教育は実施されていなかった。また、当時はまだ彫塑への関心が薄く、一般大衆の彫塑への興味は少なかった時代でもあった。1952年（昭和27年）に石本秀雄（1908–1986）の尽力と内山良男のはたらき及び佐賀県のバックアップにより佐賀大学教育学部に特別教科（美術・工芸）教員養成課程（以下「特設美術科」）が設置された<sup>2</sup>。特設美術科の彫刻教室の初代教授として緒方敏雄と同時期に非常勤講師として駆け付けた古賀忠雄<sup>写真1</sup>により本格的に美術教員、彫刻家が育成されることとなった。

「塑像と素材展」はその二人をはじめ山本民二（1919–2008）、成富宏（1941–）、徳安和博（1967–）と歴代の佐賀大学彫刻教室の教授たちと講師の安永良徳（1902–1970）を取り上げ、計7点の作品を展示紹介した。

本稿では、「塑像と素材展」展覧会報告と同時に、彫刻教室初代教授の緒方と九州の彫刻教育及び発展に尽力した古賀の二人について述べる。



【写真1】古賀忠雄集中講義来佐記念（前列右から二人目緒方三人目古賀）

### 2. 展覧会について

塑像と素材という展覧会名について、彫刻作品は同じ形でも素材によって受ける印象が違うという一つの特性があり、本展覧会では素材がブロンズの作品2点、樹脂の作品4点、石こうの作品1点と様々な素材の彫刻作品を出品し素材の違いにより、受ける印象の違いを鑑賞者に感じてもらう狙いがあった。

会場となった特別展示室は小さい部屋だが、中心に緒方の《女性立像》<sup>図1</sup>を展示し、古賀の《男の顔》<sup>図2,3</sup>はブロンズと石こうという異なる二つの素材で表現された違いを見てもらう展示とした。そして、歴代の教員たちの作品を1点ずつ展示した。成富氏（佐賀大学名誉教授）の《亜紀》と徳安氏（佐賀大学教授）の《アンドロメダ》は本人たちご協力のもと出品いただいた。緒方の《女性立像》、古賀の《男の



【図1】女性立像



【図2】男の顔 石こう



【図3】男の顔 ブロンズ 1947.8

顔)、山本の《無題》、安永の《人物》は当館所蔵作品である。緒方の《女性立像》は前年度にご遺族の方にご寄贈いただいたもので、実際に使用していたアトリエを拝見し、緒方についてのお話も伺った。緒方の《女性立像》、成富氏の《巫紀》、徳安氏の《アンドロメダ》は当館では初公開となった。展覧会は約4カ月と長期であり、協力いただいた方や、当時の学生の方々にも来館いただいた。展示している作品を前に懐かしそうに当時のことをお話しいただき「緒方先生は学生指導に熱血だった」「山本先生は静かに指導するタイプの人だった」「古賀先生は本当にすごい人で他分野の学生も先生に教えてもらいに来ていた」「安永は当時みんなから「りょうとく」と呼ばれていた(本名はよしのり)等、様々な貴重なお話を伺えた。お話からは作家たちの教員と作家という両面をうかがい知ることが出来た。展覧会の反省点として、当初は木、石、スチロール、石こう、樹脂、ブロンズと様々な素材を同じ重さで展示し、大きさの違いによる見た目素材の違いを感じてもらおう企画をたてていたが、担当学芸員である筆者の力不足により、素材の違いによって受ける印象の違いを見せることが十分に出来なかったことが挙げられる。

「塑像と素材展」についての展覧会報告はここまでとして、次の章から緒方敏雄と古賀忠雄について述べていきたい。

### 3. 緒方敏雄と古賀忠雄

緒方敏雄は1906年(明治39年)に兵庫県神戸市に生まれ、福岡県立久留米商業(現久留米市立久留米商業高等学校)、東京美術学校彫塑科(現東京藝術大学)を卒業した。1932年(昭和7年)の帝展(現日展<sup>3)</sup>)初入選以降、日展、日彫展に発表をつづけた作家であり、佐賀大学発足当時の工作研究室文部技官、特設美術科彫刻教室の初代教授を務めた。緒方は佐賀大学だけでなく佐賀県の近代彫刻、美術教員の養成にも携わり多くの彫刻家、美術教員を指導、育成した。学生指導は熱心で、塑像の授業ではモデルをよく見ることはもちろん、解剖学的な面からも指導した。ただし、言葉よりも先にヘラが入るのが常だったと聞いている。また、授業や自習で制作した作品は佐賀美術協会展(美協展)や佐賀県美術展覧会(県展)などの公募展に必ず出品するように指導されたようだ。公募展に出品させるのは、自分が制作した作品に、自信が無いとか、納得がいけないなど学生に限らずあることかもしれないが、学生が作品を作りっぱなしになるのを防ぎ、卒業後も作品を発表していけるように学ばせる役割もあったように思う。緒方の熱い指導が伝わる話として、公募展に出品させるだけでなく、自らが学生の交通費や時には食事代まで負担し、佐賀県内だけでなく福岡の県展や展覧会にも連れて行き、作品について熱心に学生たちに語ったという話もある。制作して発表するアウトプットだけでなく、作品鑑賞や資料に触れインプットする大切さも学生たちに伝えようとしたのだ。佐賀大学退官後は福岡へ居を移し、福岡市美術館南口側に建立された《廣田弘毅銅像》や1984年(昭和59年)からの日展委嘱出品、第13回日展(昭和56年)特選の《夏日断章》と精力的に制作している。緒方は具象彫刻の研究や発展を目指すなかで、優美な裸婦像も遺しており、日展で特選を受賞した《きこえる》(1977年:昭和52年)と《夏日断章》(1981年:昭和56年)はともに裸婦像である。今回の「塑像と素材展」にも大きくはないが裸婦像を出品した。その出品作《女性立像》について述べたい。《女性立像》の制作年は不明である。ただ、ポーズや女性の顔つきから恐らく《夏・一章》の関連作品ではないかと考察する。

この作品はご遺族のご厚意で作品調査させていただいた際、緒方が使用していたアトリエに隣接する母屋の玄関にたたずんでいた。小さい作品だが、どこか厳かさで小ささを感じさせない印象が強かった。この時、《女性立像》の他にも《夏・一章》を含め3体が同じようにたたずんでいた。大きさは一番大きくて等身



【写真2】制作中の緒方 佐賀大学彫塑教室にて1965年頃



【図4】きこえる 1977年



【図5】夏日断章 1981年



【図6】夏・一章 1985年

の《夏・一章》で、他の2点は《女性立像》よりも小さい作品だった。実は、調査させていただいたアトリエや玄関には女性像が多く残されており、男性の胸像や銅像の雛形は10点未満だった。前述したように、緒方は《菊池武光像》（福岡県大刀洗町）、《広田弘毅像》（福岡市美術館前）、《田中六助像》（福岡県田川市）他にも様々な肖像を残し雄々しい作風が強いが、同時にしとやかで美しさのある女性像も多く残した作家であった。

古賀忠雄は1903年（明治36年）に佐賀県佐賀市生まれで小学生の頃には、図画、手工、習字が大変優れていたといわれている。早くから東京美術学校に進みたいと望んでおり、3年制の県立有田工業学校の図案絵画科に入学する。日本有数の窯場である、有田でこの頃の学びが後に優れた陶器や陶塑作品をつくりだすことにつながったのではないかと考える。実際に古賀は彫刻制作と同時に彫刻を施した陶の板のレリーフ作品も制作しており、日本陶彫会会長も務めている。有田工業学校を経て東京美術学校在学中に帝展で入選し、卒業後も日展で活躍した。精力的に制作を続けると同時に1957年（昭和32年）から1960年（昭和35年）まで佐賀大学に講師として駆け付けた。勤務したのは4年間だったが学生への指導さらには佐賀県内外の彫刻家たちへアドバイスするなど九州の近代彫刻の発展にも尽力した。古賀は戦前から戦後まで大作を発表してきたのと平行して、戦後間もない頃、新聞紙上に「《入門のしおり》彫塑」の冒頭で次のように語っている。

「人は平面では生きれぬ——これは私の持論だが、人は生れると同時に立体をさずかっている。立体を持った人間が彫塑を解しないということはありませんと私は思う。また、すべてを知り究めようとするのは人間の精神であり、それは量=立体をハクすることで解決されねばならぬであろう。人間の精神と立体はそれほど密であるのに、彫塑というものが現在ふしぎなほどに日本では大衆のなかに流れていっていない。なぜであろうか。日本の彫塑の伝統は決して新しいというのではないが、それを自分の生活のなかに持ってきていない。（中略）われわれの日常をかえりみれば茶わんひとつにも立体はふれてくるのだ。ひとつの茶わん——ただ見ているだけでなく人は手に取ってふれてみたい。そこに量=立体を求め人間の性向があるはずだ。……（談）」

この言葉からは、まだ彫塑への関心が薄かった時代に、一般大衆の彫塑への興味と理解を深めようと懸命に語っている古賀の姿がある。今でこそ、彫塑への関心は、環境彫刻などにより一種の需要を満たし理解されつつあるかもしれないが、油彩画はともかく彫塑への興味・関心がほとんど無かった時代に一般大衆にむけた言葉は貴重であり、古賀の熱意と一種の願いが伝わってくる。日本芸術院会員、日展常務理事、社団法人日彫展理事長、と様々な要職を務め、多忙のなか晩年まで作品を発表し続け、九州のみならず日本の彫刻会を牽引した。

緒方と古賀は同時代に生き、緒方は専任教授として、古賀は講師として佐賀大学で教鞭を執った。当時の学生であった方に伺った話に、緒方が大学の非常勤講師として招いた、東京美術学校での先輩にあたる古賀に指導を受ける様子もあったそうだ。このことは、すでに日本の彫刻界の指導者であり、彫刻・立体をキューブとして捉えようという理念を確立し、リアリティを追究した先輩として、緒方が古賀に対しては率直に敬意をもって接していた逸話だと思われる。<sup>写真3</sup>



【写真3】緒方（左）と古賀 1955年

## おわりに

「塑像と素材展」の展覧会報告と緒方敏雄、古賀忠雄それぞれの人物像について述べた。

ここで述べた緒方と古賀それぞれの人物像については作家であり、指導者でもあったふたりのほんの一部に過ぎない。今後も調査が必要である。

—最後に、本展覧会開催にあたりご協力いただいた皆様に改めて感謝申し上げます。

## 参考文献

『愛と心 古賀忠雄彫塑展』 中央画廊、ギャラリー佐賀、佐賀印刷社、1976年

『日展史』 日展史編纂委員会企画・編集、1980年

『心のうた 古賀忠雄彫塑展』 佐賀県立博物館、福博印刷、1981年

『彫刻家 古賀忠雄の知られざる世界』 練馬区立美術館、大塚工芸社、1988年

『緒方敏雄 人と作品』 佐賀大学美術工芸科同窓会、佐賀大学美術工芸教室、緒方敏雄先生、回顧展実行委員会、佐賀大学文化教育学部彫刻研究室、佐賀印刷、1998年

『日本彫刻会史:五十年のあゆみ』 日本彫刻会三十周年記念事業委員会、2000年

## 註

- 1 「塑像と素材-佐大の彫刻」展の目録等は、本書 8-9 頁を参照。
- 2 佐賀大学教育学部特別教科教員(美術・工芸)養成課程の設置経緯及び、「特設美術科」から文化教育学部美術・工芸課程への経緯については中牟田彰「佐賀大学教育学部美術・工芸教室(特設美術科)小史」(『美術・工芸教育學』第1号、1993年、1-10頁)及びそれを加筆した前村晃「佐賀大学における美術・工芸教室の変遷-〈特美〉の設置から今日まで-」(『佐賀大学開館記念展:美術・工芸教室60年の軌跡 I-〈特美〉の育成者たち展図録、2013年、69-77頁』)に詳しい。
- 3 日本美術展覧会。明治40年に第1回文部省美術展覧会(略して文展)が開催。以降「帝展」「新文展」「日展」と名称を変え現在にいたる。-「公益社団法人日展ホームページ(日展の歴史と現在(いま))」より抜粋



## 研究ノート

# 岩永京吉作品における女性像の一考察

—佐賀大学美術館所蔵《裸婦》(1963)を中心に

出口智佳子

佐賀大学美術館 学芸員

### はじめに

2017年10月17日より、およそ6か月間佐賀大学美術館にて「たたずむ女性たち-所蔵品にみる女性像」を開催した。本展は「たたずむ」と「女性」という2つのテーマを共通項として様々な技法で表現された当館所蔵の女性像を紹介するものであった。その中で、岩永京吉《裸婦》(1963) [図1]と山本民二《暦年》は、当館所蔵となって初めて公開するもので、ギャラリートークやワークショップでも中心的にとりあげる主要作品であった。<sup>1</sup>

本稿で取り上げる岩永京吉は、昭和中期から平成まで活動した現代画家である。「日本画」という絵画ジャンルはこれまで繰り返し論じられてきたように<sup>2</sup>、明治期に流入した外国の油彩画(西洋画)との技法的な違いのもと、日本の絵画芸術を守るというナショナルアイデンティティを築く動きから、アーネスト・フェノロサや岡倉天心、九鬼隆一などを中心として確立したものである。このような新たな局面にあった近代美術界の流れを汲んだ中で活動することとなる岩永は、いかに制作活動を行ったのであろうか。本稿では、当館所蔵《裸婦》が現代日本画家の岩永にとっていかなるものであったかを考察することを目的とする。構成は、まず当時の日本画の傾向を踏まえながら、岩永京吉の画業全体を概観する。次に、《裸婦》とその周辺に位置する女性像を比較し、岩永の画業における《裸婦》の位置づけを行いたい。

## 1. 岩永京吉の画業

岩永京吉(1917-2011)は、1917年に佐賀県鹿島市に生まれ、染物業を営む両親の下で育った。1934年、17歳の時に上京し、日本画家の小泉勝爾<sup>3</sup>に師事する。翌年に東京美術学校(現東京藝術大学)の図画師範科日本画専攻に入学し、日本画家川崎小虎<sup>4</sup>のもとで日本画を学んだ。東京美術学校を卒業後、1938年4月に長野県の中学校に教師として勤務するが、アジア・太平洋戦争の勃発により応召し、ビルマなど海外へ兵士として派遣された。終戦後、1946年に佐賀県に帰郷、佐賀県立鹿島中学校にて教鞭を執り、以降佐賀を活動の拠点とした。岩永は32歳の時に初めて公募展の佐賀美術協会展に《芙蓉》(1949)を出品、受賞し、翌年に佐賀美術協会展の会員となり、戦後になって本格的な作家活動を始めることとなる。

1982年に出版された『岩永京吉作品集』によると、作家自身で画業の傾向を5つの時代に分けている。まず、第一期は1933~1945年で、日本画の制作を始めたごく初期から終戦までの期間である。岩永は第一期を「日本画を習いかけて戦争のためにぶち壊された時代」<sup>5</sup>であったと語り、この期間の後半にはほとんどの制作活動が中止せざるをえなかった。第二期は1946~1954年で、戦前の国粹主義から戦後の新しい思想へと思潮変革が影響し、日本画の作品表現が大きく変化した時代で、制作には絵具を多く使用したという。またこの時期に生涯の師となる日本画家の立石春美(1908-1994)と出会い、教を請うようになった。第三期は1955~1965年の中央の公募展へと志向していた時期で、日展出品を目指しつつ、自身の作



[図1] 岩永京吉《裸婦》(1963) 佐賀大学美術館



[図2] 岩永京吉《阿弥陀仏》(1965) 佐賀県立美術館

品制作について思索していた。この時期に、第10回日展にて《阿弥陀仏》(1965) [図2] が初めて入選した。これは、本稿の中心作品である《裸婦》(1963)の2年後に描かれている。第四期は日展入選後、1966～1974年のモチーフが確立していた時期で、漁村風物を作品の主題として定着していった。浜や漁村、そこで生きる人々を多く描き、「絵を描くことが面白くなった」と語っている。第五期として佐賀大学に勤めた時期の1975～1982年頃を指している。第四期の漁村などのモチーフ確立から、これまでの制作を総合する時期に差し掛かり、却って様々な方向性に迷っていることを語っている。この期に画集『岩永京吉作品集』を出版した。第五期以降は、牡蠣の漁村をはじめ、家族や風景などをモチーフとして積極的に取り入れた作品が多い。岩永はこれらをモチーフとして日展に出品し、2010年まで制作を続けた。

## 2. 岩永京吉作品の初期から中期作品における女性像

《裸婦》(1963)は岩永作品の中で第三期にあたり、2010年まで制作を続けた彼にとって丁度、中期の作品といえるであろう。《裸婦》が岩永の画業においていかなる位置づけがなされるのかを比較するため、本節では、初期作品と中期作品の女性像を取り上げ、その傾向をみていく。

岩永の画業、第一期と第二期(1933～1954)に該当する女性像は、中期と後期の作品といえる第四期と第五期(1966～1982)のものに比べて、伝統的な日本画の表現がなされているといえる。描かれたモチーフは、境界をはっきりとさせた輪郭線に、単一的な淡い色彩がほどこされている。多くが《山荘の朝》(1953) [図3]のような着衣の女性で椅子にもたれたり、櫛などの女性性を象徴するようなアトリビュートを持たせたりしている [図4]。彼女たちの視線は鑑賞者と視線が交わることなく画面の外に向けられ、全体的にしとやかな雰囲気で描かれている。岩永の描



[図3] 岩永京吉《山荘の朝》(1953) 個人蔵



[図4] 岩永京吉《女像》(1950) 岩永京吉美術館



[図5] 立石春美《淑女》(1931)『立石春美展』(1991) 20頁より

いた初期の女性像は生涯に渡って師事した立石春美から大きな影響を見ることができる。

立石春美は1908年、佐賀県佐賀郡大和町に生まれ、洋画家の梶原貫吾(1887～1958)に見いだされ、画家を志すようになった。1928年より、浮世絵を得意とする鍋木清方(1878～1972)門下の伊東深水(1898～1972)に師事し、立石自身も浮世絵、特に美人画を多く描くようになる。23歳の時に制作し、帝展で初入選を果たした《淑女》<sup>7)</sup>(1931) [図5]は、立石の高いデッサン力が表れ、簡潔な構図でありながら、しっとりとした雰囲気を醸し出す作品である。1950年代以降になると、簡潔かつ清楚な女性像の初期作品から発展し、内面への探求を表した画風へと変化する<sup>8)</sup>。立石の内面性や精神世界を表出する作風と、岩永における中期作品は共通ものを見出すことができる。

立石春美《寂》(1973) [図6]は、古代の石棺を描いたもので、輪郭をはっきりとさせて描いた美人画とは異なった筆致で描かれている。橙色を基調とし、様々な色の絵

具を塗り重ね、それら色の微妙の変化を用いて中心主題である石棺を浮き上がらせ、神聖なものを描いている。岩永京吉《阿弥陀仏》は群青色を基調とした中に鎮座する仏像を描き、青色の中には、黄色や橙色などが含まれ、作品の世界に重量感と奥行きを持たせている。これら2作品で描かれているのは石棺と仏像で、世俗的なモチーフではない。石棺は古代の死後の世界を、仏像は仏教の宗教世界をそれぞれ表現しており、精神的世界の産物を描いていることが共通しているといえよう。さらに、立石春美《華の幻想》(1974) [図7] は、画面中央の女性を中心として、背後に裸婦が二人描かれている。彼女たちの周りには白い花々や蝶が配され、全体として三美神を想起させる観念的な世界を表現している。立石においては、このような作品と世俗的なモチーフを扱う美人画とは描き方ははっきりと異なっているといえる。石棺の塗り重ねられた橙色の絵具と、美人画の女性の肌や着物の単一的な色彩を比べると、明らかにモチーフや意図によって、表現方法を区別していたことがわかる。

一方、岩永においては、モチーフによる明確な描き分けはなされていないようだ。例えば、《暖冬》(1972) [図8] は、女性と猫を描いた作品である。一人の女性が所在なげに膝の上に猫を抱え座っている。画面右上に青い窓の断片が描かれているため、背景は白壁であることが予想される。白壁には、青色、橙色、翡翠色など様々な色彩が施され、厚いマチエールによって画面全体が浮き出ている。色彩やマチエールから、暖かな印象が与えられ、《暖冬》というタイトルによってさらにその効果をあげていえよう。ここでは、美人画が描かれる際に、伝統的によく取り上げられるモチーフ、「猫」と「女」が描かれている。岩永はこれらを描きながらも、その表現方法は《阿弥陀仏》と似た筆致を用いている。初期にあたる第二期までの女性像は《山荘の朝》や《女像》(1950) [図3、4] などがあるが、第三期に描いた《裸婦》(1963) や第四期にあたる《暖冬》の女性像とは異なっていることがわかる。

### 3. 岩永京吉《裸婦》(1963) の位置づけ

「裸婦」というモチーフは、伝統的な西洋絵画においては歴史画や寓意画の中で登場する。例えば、女神ヴィーナスを描く時には裸の女性を描いたり、抽象概念を表出するために裸婦を用いたりしていた。一方、西洋画を輸入する近代以前の日本画には、裸婦を中心的なモチーフとすることは少なく、女神であっても着衣の婦人像で描かれている。裸婦の寓意画を多く描き、外光派として知られるフランス人画家のラファエル・コラン(1850-1916) [図9] は、黒田清輝(1866-1924)をはじめ久米桂一郎(1866-1934)、岡田三郎助(1869-1939)など多くの日本人画家に影響を与えた。黒田清輝は《智、感、情》(1897-1898) [図10] において抽象的な概念を表すために金地に裸婦を描いている。風俗画のジャンルにおいて裸婦を描いた黒田清輝《朝妝》(1895) は、裸体画論争<sup>9</sup>を巻き起こし、明治はじめに裸婦画がいかにか受容されていたかを示す手がかりを残している。黒田は、キリスト教の祭壇画のような正面観を用い、イコン的な要素を意図して構成し、世俗とは異なる抽象概念を《智、感、情》に表出させた<sup>10</sup>。明治以降、黒田らの作品から徐々にモチーフとして裸婦は、受け入れられるようになり、近代的なモチーフとなる。

このような背景から岩永京吉《裸婦》(1963) も、単なる裸体の女性ではなく何らかの概念を表出させたものと考えられる。本作品は、縦136cm、横90cmの日本画で縦長の構図に少しうつむき左を向いた一人の裸婦が描かれている。女性の明確な表情までは読み取りにくい、基調色として使用されている黄色によって、若さや明るさといった肯定的な意味合いを想起させる。ここでは、第二期までに見られていた明瞭な輪郭線を用いた女性像とは異なり、モチーフの女性と黄色の背景との境界線は曖昧にされ、一見、平面的な印象を与えるが、実際には厚いマチエールが施され、作品に存在感を与えている。特にごつごつした背景とさらさらとした裸婦の肌による意図的なマチエー



[図6] 立石春美《寂》(1973) 佐賀県立美術館



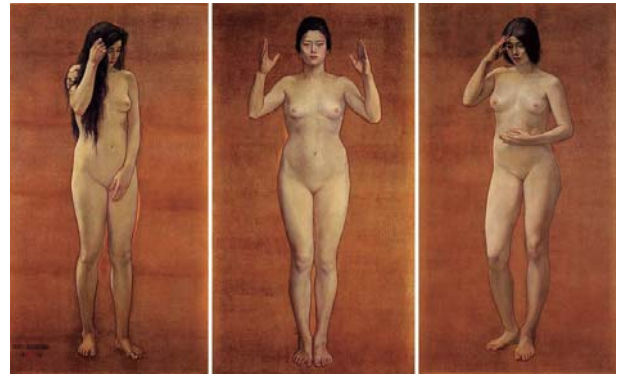
[図7] 立石春美《華の幻想》(1974) 佐賀県立美術館



[図8] 岩永京吉《暖冬》(1972) 岩永京吉美術館



〔図9〕ラファエル・コラン 《フロレアル（花月）》（1886）アラス美術館



〔図10〕黒田清輝《智、感、情》（1897-1898）東京国立文化財研究所



〔図11〕岩永京吉《裸婦》（1964）岩永京吉美術館



〔図12〕岩永京吉《牡蠣を打つ母娘》（1979）鹿島実業高等学校

ルの差異は触覚的な効果を与えている。

岩永自身、本作品の制作日誌に黄色という色を「光の色、喜びの色」と位置付けている<sup>11</sup>。この色は立石春美に諷められるほど<sup>12</sup>繰り返し好んで用いたもので《裸婦》（1964）〔図11〕にも全面的に配されている。明治以降の日本近代美術史におけるモチーフの裸婦や立石春美《華の幻想》、さらに岩永自身の言及から、本作品は「光」や「喜び」などの肯定的な抽象概念を表出した寓意画であると言える。

本作品の2年後に、《裸婦》と同様のマチエールを用いた《阿弥陀仏》によって日展初入選を果たし、岩永は一つの到達点を迎える。第三期を振り返り岩永は「岩絵具についての一つの技法を体得してい乍ら、おかしな話ですが、それまで忘れていた大事な「絵」をつくることをしきりに考えました。描き潰しばかりでまとまった作品の少ない時期ですが、「阿弥陀仏」によって日展入選を果たし、終戦より20年の苦節を経てやっと夢が一つ実った時です<sup>13</sup>と語っている。後に、描き続けることとなる《牡蠣を打つ母娘》（1979）〔図12〕のような漁村や漁夫などは、主題や色彩は変化しているが、《裸婦》（1963）や《阿弥陀仏》と同様の筆致で描いており、岩永の後期の作品にも受け継がれている。つまり、第三期は岩永の画業全体の中で作品の方向性を決定した時期であり、中でも《裸婦》（1963）は画家自身のうちにある「光」や「喜び」を表現した作品であると言える。

#### 4. おわりに（結論）

本稿では岩永京吉画業を振り返り、画家自身が定めた5つの時期を踏まえながら、初期と中期の作品傾向や《裸婦》（1963）周辺作品から、本作品の位置付けを試みた。まず、初期作品の女性像は、師の立石春美が描いたような輪郭線がはっきりとし、マチエールを多用せず単一的な色彩を用いていた。その一方、美人画を得意とする立石春美は、《寂》や《華の幻想》といった抽象概念を表すような作品において、彼のそ

れまでの美人画には見られないざらざらとした画肌のマチエールを用いていた。彼らが活躍することとなる近代美術史の枠組みが形成されたのは、西洋画の流入から大きな影響を受けている。明治期より黒田清輝らが抽象概念を表す寓意画のモチーフとして「裸婦」を紹介し、日本近代美術に西洋絵画のモチーフを取り込んだ。岩永はこのような歴史的背景を持つ「裸婦」を主題に選びながら、裸体以外の《阿弥陀仏》などにも、《裸婦》と同様のマチエールを施している。本作品は「裸婦」というモチーフや師の立石春美の作品傾向から、何らかの抽象概念を描いた作品だと考えられる。岩永の本作品の制作日誌には黄色は「光の色、喜びの色」と残されており、立石から諫められるほど黄色を好んで用いていた。《裸婦》は、当時の岩永における「光」や「喜び」という概念を表した寓意画であったと言える。さらに、このような筆致の表現は後期作品にも引き継がれ発展しており、第三期は岩永の画業全体の中で、作品の方向性を決定した時期であったと言える。

## 謝辞

本稿は2017年10月より佐賀大学美術館にて開催した「たたずむ女性たち-所蔵品にみる女性像」の調査を基とし、展覧会の中心的な存在であった岩永京吉《裸婦》(1963)が画家においていかなる存在であったのかを考察したものです。本稿執筆にあたりご協力とご助言賜りました岩永京吉美術館館長石川宗晴先生、同美術館の石川郁子様にご心よりお礼を申し上げます。また、本展覧会開催にあたりご協力いただいた元佐賀大学美術館学芸員の上田香苗先生をはじめ、ご関係の皆様へ深く感謝申し上げます謝辞とさせていただきます。

## 主要参考図書

岩永京吉作品集編集委員会編『岩永京吉作品集』岩永京吉作品集編集委員会、1982年  
辻惟雄編『幕末・明治の画家たち-文明開化のはざまに』ベリカン社、1992年  
立石春美展実行委員会編『立石春美展』立石春美展実行委員会、1999年  
植野建造『日本近代洋画の成立』中央公論美術出版、2005年  
ミカエル・リュケン『20世紀の日本美術』南明日香訳、美術の図書三好企画、2007年  
喜多崎親『聖性の転位』三元社、2011年  
高階秀爾監修『美人画の系譜』小学館、2011年  
古田亮『日本画とは何だったのか近代日本画史論』角川選書、2018年

## 註

- 1 企画展「たたずむ女性たち-所蔵品にみる女性像」の目録等詳細は、本書18～19頁を参照。
- 2 古田亮『日本画とは何だったのか近代日本画史論』において、古田氏は近代日本画を伝統的な日本絵画が西欧の絵画(油彩画等)の受容によって浮き彫りとなり、発展、クレオール化した絵画ジャンルという。(『日本画とは何だったのか』角川選書、2018年、9頁より参考。)
- 3 小泉勝爾(1883-1945)大正から昭和初期までに帝展や文展を中心に活動した日本画家。花鳥や風景画などを得意とした。《濤声》(1931)にて帝展特選。
- 4 川崎小虎(1886-1977)院展および日展を中心に活躍した岐阜県出身の日本画家。祖父川崎千虎(1836-1902)は土佐派の流れを汲んだ明治期日本画壇の大家。祖父に大和絵を学び、東京美術学校にて下村観山、川端玉章、寺崎広業、小堀鞆音、結城素明、松岡映丘らに日本画を学んだ。代表作として《伝説中将姫》(1920)や《オフィリヤ》(1927)などがある。
- 5 岩永京吉作品集編集委員会編『岩永京吉作品集』岩永京吉作品集編集委員会、1982年、113頁より引用。
- 6 前掲書『岩永京吉作品集』、113頁より引用。
- 7 立石春美《淑女》(1931)は、目黒雅叙園美術館に所蔵されていたが、2001年の同館閉館後、本作品は散逸、所蔵不明となった。
- 8 立石春美展実行委員会編『立石春美展』立石春美展実行委員会、1999年、7～17頁より参考。
- 9 「裸体画論争」は、1895年の第4回内国勧業博覧会にて黒田清輝がフランス留学中に描いたアカデミックな作風の裸婦《朝妝》を発表したことに端を発する。裸婦画の展示には、警察の取り締まりを受け、風紀論争を巻き起こしたり、白馬会等の展覧会においては裸婦画を展示するための特別室などが設けられたりした。(植野建造『日本近代洋画の成立』中央公論美術出版、2005年、66～86頁より参考。)
- 10 喜多崎親『聖性の転位』三元社、2011年、254～308頁より参考。
- 11 岩永京吉制作日誌(岩永京吉美術館蔵)参照。
- 12 岩永京吉宛の立石春美書簡(岩永京吉美術館蔵)参照。
- 13 前掲書『岩永京吉作品集』、113頁より引用。



佐賀大学美術館

**平成29年度**

年報＋紀要



2018年11月30日発行

発行 佐賀大学美術館 ©2018

佐賀市本庄町1番地

企画・編集 枝國武司+鬼塚美津子+今村真由美+出口智佳子(佐賀大学美術館)

編集協力 廣木昭則(佐賀大学美術館)

印刷 株式会社 昭和堂

※本書の仕様は、「平成25年度年報+紀要」(デザイン:佐賀大学文化教育学部 荒木博申教授)を踏襲した。



佐賀大学美術館

SUAM

THE SAGA UNIVERSITY ART MUSEUM